

平成
26
年度

の じ ぎ く 文 芸 賞

2014
Literary
Works

兵庫県・公益財団法人兵庫県人権啓発協会

発刊にあたって

県民の皆さまに主体的に人権について考え、作品づくりをとおして豊かな人権感覚を身につけていただくために実施してきた「のじぎく文芸賞」も、今年度で第二十一回を迎えました。第一回（平成六年度）の応募作品は九十二編。二十一回目となる本年度は、一三七三編のご応募をいただき、この二十一年間での応募総数は一三一一三編となります。県民の皆さまの人権問題への関心が高まり広がってきたことを改めて実感せずにはいられません。

この二十一年の間に、少子・高齢化や情報化の急速な進展、人々の価値観や生き方の多様化に伴い、人権課題もますます多岐にわたり、複雑化してまいりました。子どもや高齢者への虐待、いじめ、体罰、職場におけるセクハラやパワハラ、インターネットを悪用した差別事件などの人権侵害は後を絶ちません。また、東日本大震災に起因する様々な人権課題も発生し、家族や地域、職場等での人と人とのつながりや支え合いが薄れる「無縁社会」と呼ばれる状況の拡大も大きな問題となっています。

兵庫県では、私たち一人ひとりがお互いの人権の尊重を感性として育み、日常生活の中で人権尊重を自然に態度や行動として表すことが文化として定着している社会をめざして、「人権文化をすすめる県民運動」を市町とともに展開しているところであり、「のじぎく文芸賞」も、その取り組みの一つです。人の優しさや思いやり、支え合うことのすばらしさ、生命や人権の尊さ・大切さなどが綴られ、人権課題の解決に向けて明るい展望が描かれた数々の作品が、ひょうご人権ジャーナル「きずな」や市町の人権啓発冊子に掲載されるなど、広く人権啓発に活用されてまいりました。

このささやかな冊子には、本年度の応募作品の中から、最優秀賞四編、優秀賞七編を収録いたしました。人権啓発や研修の場でぜひご活用いただき、日常生活での実践につなげていただくことを願っています。

最後になりましたが、多数の作品について、慎重かつ厳正な審査をしていただきました審査委員の皆さまに心よりお礼申し上げます。

平成二十六年十二月

兵 庫 県

公益財団法人兵庫県人権啓発協会

平成26年度 人権問題文芸作品「のじぎく文芸賞」受賞者

氏 名	作 品 名	部 門 (部)
〈最優秀賞〉		
高 木 浩 志	マユミおばちゃんの唐揚げ	小 説 (一般)
小 野 まゆみ	イルカの詩	随 想 (一般)
入 江 輝 侑	サクラのきょうだい	詩 (学齡児童生徒)
石 川 純 子	お母ちゃんの力こぶ	創作童話 (一般)
〈優秀賞〉		
福 嶋 あきら	シーポルちゃんが喋った日	小 説 (一般)
山 本 幸	手のひら	小 説 (学齡児童生徒)
大 橋 克 子	そんなん分かるやん	随 想 (一般)
永 井 魁	自分らしくいること	随 想 (学齡児童生徒)
中 下 重 美	風になる	詩 (一般)
内 藤 廉 哉	サギの親子	詩 (学齡児童生徒)
藤 本 忍	心の色	創作童話 (一般)

※創作童話部門 学齡児童生徒の部 該当作品なし

〈佳 作〉

齋藤恒義 永尾美典 小林良之 小山菜那 柴田真理子 塚口佳子 中川幸代 中野晶 みきみのり 田井芳枝 いなみしんじ 大西泰輝 森園順子 齋藤向日葵 古谷千歳 田邊和代 高木里朋

ふれあい記念日

空に近い、あの場所

空を見上げて 微笑みを！

雪と誓い

大根と冬瓜

さあ、今日も心のハイタッチを！

日本じゅうの

「もらいっ子」さんたちへ

まずは「知ること」から

じんけんさくぶん

蕎麦の畑で

アザーボイズ

素直になれたら

かくれんぼ

やさしい心

ゆきの幸せ

やみ色のヒツジ

雨の中で出会って

小説（一般）

小説（一般）

小説（一般）

小説（学齢児童生徒）

随想（一般）

随想（一般）

随想（一般）

随想（学齢児童生徒）

随想（学齢児童生徒）

詩（一般）

詩（一般）

詩（一般）

創作童話（学齢児童生徒）

創作童話（一般）

創作童話（一般）

創作童話（一般）

創作童話（一般）

創作童話（学齢児童生徒）

目次

【総評】		審査委員長	古山桂子	 1
【部門別審査講評】		各審査委員		2
【最優秀賞・優秀賞作品】				
《最優秀賞》				
〈小説部門〉	マユミおばちゃんの唐揚げ		高木浩志	 21
〈随想部門〉	イルカの詩		小野まゆみ	 37
〈詩 部門〉	サクラのきょうだい		入江輝侑	 43
〈創作童話部門〉	お母ちゃんの力こぶ		石川純子	 45

《優秀賞》

〈小説部門〉

（一般の部）

（学齡児童生徒の部）

シーポルちゃんが喋った日	福嶋 あきら	51
手のひら	山本 幸	66

〈随想部門〉

（一般の部）

（学齡児童生徒の部）

そんなん分かるやん	大橋 克子	79
自分らしくいること	永井 魁	83

〈詩 部門〉

（一般の部）

（学齡児童生徒の部）

風になる	中下 重美	85
サギの親子	内藤 廉哉	86

〈創作童話部門〉

（一般の部）

（学齡児童生徒の部）

心の色	藤本 忍	87
該当作品なし		

◆平成26年度応募作品の内訳

部 門	部		
	門		
一般（高校生以上）	学 齡 児 童 生 徒 （ 中 学 生 以 下 ）	合 計	
小説	6	23	
随 想	883	944	
詩	40	370	
創作童話	34	36	
応募総数	1221	1373	

◆平成26年度審査委員

古 山 桂 子 （ 総 括 ）	野 元 正 （ 小 説 ）
時 里 二 郎 （ 詩 ）	前 田 功 （ 創 作 童 話 ）
	三 浦 暁 子 （ 随 想 ）

総評

審査委員長 古山 桂子

「のじぎく文芸賞」では、いつも新しい出会いに期待を抱きながら読ませていただくのですが、毎回新鮮な発見があり、読み手にとってもとても充実した時間が与えられることを有り難く思っています。

小説、随想、詩、創作童話の各部門を読み終えた時、いささか古めかしい感想ですが、恕（じょ）という字が頭に浮かびました。孔子は弟子が「人間として一番大切なことを一言でいうと何ですか」と質問したのに対して「ソレ恕力」と答えたところ『論語』にあります。続けて「己（おのれ）ノ欲（ほつ）セザル所ハ人ニ施スコトナカレ」という有名な言葉を付け加えたとか。自分がされていやなことは、他人にもしてはいけない、一番大事なのは人に対する思いやりだと。

私は十代でこれを習った時は不遜にも、いやに簡単な話だなぁ、人間にはもつと深遠なことがあるのではないかと思ったものです。しかし年を重ねていくうちに本当の思いやりということがいかに難しいか、身にしみて分かるようになりました。相手の立場になる、相手を尊重する、それにはこちらに豊かな本当の想像力、優しさが必要なのだということも分かってきました。

人権問題もこの点に尽きるように思います。孔子の時代から二五〇〇年経ても変わらない真理ですが、それを私たちはまだ克服できていません。

寄せて頂いた作品はさまざまないじめ、差別、病気、障害、事故や災害、家族、沖縄や拉致の問題まで内容は多彩ですが、どの作品にも一貫しているのは優しさ、思いやりです。私はそのことに感銘を受けました。受賞者中最年少の小学一年・みきみのりさんの随想「じんけんさくぶん」では人権問題を考える上で、家庭教育の大切さを教えられました。

これらの作品群が、広く県民の皆さんの人権問題を考えて頂くための新しく蒔かれた種になり、さらにそれが幹になり枝となり葉となって広がっていきますように。

部門別審査講評

【小説部門】

審査委員 野元 正

《審査総評》

今年度から小説部門の審査委員は島京子先生から私、野元正が担当することとなった。どうぞよろしく願いたい。平成26年度の小説部門の応募は、一般、学齢児童生徒の両部併せて23作品（一般17作品・学齢生徒児童6作品）であった。昨年度の38作品と比較すると少ないが、内容はそれぞれいいところがあり、その選考は大いに悩んだ。

審査の基準としては、人権文化の進展と人権課題の解決に寄与する自由題材で、

（1）テーマ「のじぎく文芸賞」作品募集の4テーマ ①人のやさしさや思いやりと支え合うすばらしさ ②一人ひとりを大切に、心豊かな社会づくりをめざす姿勢 ③生命や人権の尊さ、大切さ ④人権課題の解決に向けた明るい展望 を中心に、

（2）小説としての新鮮さと独創性 （3）作品の構成と意外性 （4）文章の表現と表記

の4つの観点から、現代社会の問題点を鋭く見据えた作品を採点制で慎重に審査した。応募作品の傾向は、生命、家柄、職業、家庭、家族愛、地域愛、教育、いじめ、体罰、障害、認知症、迷信、挫折からの再生、愛と憎しみなど多岐に渡り、現代社会が抱える様々な課題に取り組んだ作品が多かった。最終的には日常生活の中で、上のテーマを踏まえた作者しか書けない独創性と、読者に作者の思いをわかりやすく伝えようとしている作品を選んだ。

〈最優秀賞〉

作品名「マユミおぼちゃんの唐揚げ」 高木 浩志

主人公、僕（光一）は、看護師の母が夜勤の日、独りか父と一緒に夕食をマユミおぼちゃんの弁当で済ますことが多くなる。そのうちに、賄い（まな）の煮物などタッパーに入れてくれたりするマユミおぼちゃんの人間的温かさにほだされて親しくなり、父母とともにこの弁当屋の常連客になる。それは、僕の話聞いてくれるマユミおぼちゃんが母がいない日の寂しさを紛らわしてくれるからでもあった。マユミおぼちゃんは僕が陸上競技の試合に行くときはいつも、おにぎり弁当などを作ってくれたりした。

県大会《男子800m》の決勝に残った僕は、ウォーミングアップを済ませ、自校のスタンドで早めの昼食を摂る。昼食は母には悪いが、力が発揮できる験（げん）が良いマユミおぼちゃんのおにぎりだ。食後、里志が脚のマッサージをしてくれる。この里志と仲良くなったのは、マユミおぼちゃんのお陰だった。かつて里志は意地悪で、僕を苛（い）めていたのだ。学校の帰りのある日、僕は工事が中断された誰もいない工事現場の深い穴に、里志とその妹の飼（か）い犬シロが落ち、彼等が困っているのを見たが、ざまあみろ、と見ぬ振りをして弁当屋まで帰って来てしまったのだった。マユミおぼちゃんは、いくら里志が苛（い）め子でもシロには罪はないわ、ワンちゃんを助けておいで、と大きな買い物籠（かご）とロープを差し出し、助けに行かないなら、もう弁当は作ってあげん、と僕を促した。僕は素直になれず不本意だったが、ようやくシロを救出できた。そして里志とその妹と僕とシロと三人と一匹でマユミおぼちゃんにお礼に行った。僕も同じだけれど、里志はそのときの唐揚げが忘れられないという。マユミおぼちゃんのおにぎりと里志のマッサージを受けた僕は、もう入賞するしかない、と里志はいう。ふと、僕のために唐揚げを揚げてくれるマユミおぼちゃんの笑顔が浮かんだ。

子どもたちを常に見守り、導くマユミおぼちゃんの間接像が巧みに描かれ、人と人の助け合い、

人の善意、温かさ、絆の大切さが、自然に力みなく書かれた優れた作品だ。いじめや孤独や地域愛などに一筋の光明をさす掌編しょうへんだと思う。

〈優秀賞〉（一般の部）

作品名「シーポールちゃんが喋った日」 福嶋 あきら

主人公 〃私（アユミ）〃は大学受験に失敗、挫折した少女。町役場税務課のアルバイトを始める。その関連ボランティアの「ゆるキャラ：シーポールちゃん」のイベントに参加する。その休憩時間に子どもたちのいじめの現場を目撃する。我慢できずに、喋ってはならない「ゆるキャラ」の立場を忘れていじめをやめさせようと、猛然と喋り出す。それを目撃、ゆるキャラのイメージダウンを恐れた観光協会職員の跳び蹴りにあい、海へダイブし、死にそうな目に合う。私は、町長はじめ町の有力者に町長室に呼び出され詰問きつもんされるが、臨時職員といえども、いじめられていた子の家庭事情など守秘義務があるため、いじめ目撃の動機も話せず困惑する。結局、幼馴染みの助けもあり、もとと今ひとつ人気がないゆるキャラを「喋るゆるキャラ」にイメージチェンジすることで難局を乗り越え、未来に向けて大学受験勉強を再開する物語だ。

作品全体に流れる明るさと人を見る目の温かさがすばらしい。「月浜町」というおそらく架空の町の設定の独創性や、いじめ問題を真正面から語るのではなく、この作品を読むうちに自然に染みいつてくるのが良い。また町衆の、「ゆるキャラ」のイメージ変更という将来への発展を視野に入れた、意外で柔軟な結論づけが心を温かくし、和ませる。題材の新鮮さ、意外な解決、さり気ないメッセージ性のある秀逸しゅういつな作品だ。

〈優秀賞〉（学齡兒童生徒の部）

作品名「手のひら」 山本 幸

高校1年生の夏、母子家庭で育った裕美は母方の祖母裕子の家に泊まりに行くことになる。どうせ何もすることがないと思う夏休み、水田や畑が広がり、その上の青空、緩やかに流れる小川、すべてが澄み切った閑静な田舎、趣のある木造家屋。祖母が取れたての野菜の収穫と食事など、いろいろ面倒をみてくれるうちに裕美の心は開放されていく。祖母の友だちと出会い、心を通わせる。近所の人びとは、祖母と野菜など収穫物の交換など助け合って生きている。

ある雨が激しく降りしきる夜、祖母は貧血で倒れる。大事には至らなかったが、裕美は村人へ伝えることしかできなかった自分を、何も出来なかったと悔いるが、そんなことはない。村人から励まされる。卵焼きなどを作り、祖母にごはんを作る。裕美のなかにはやさしさ、あたたかさ、思いやりなどが沸き立ち、祖母と孫娘の平凡なひと夏の生活は、裕美に心の成長を感じさせる。

裕美の母も裕美のことをかまってやれなかったことを悔い、新しい母子ふたり家族の生活が始まる。社会の絆の大切さ、人々を思う心が巧みに表現されているが、人権や心豊かな社会づくりなど、課題テーマについては少し弱い気もするが、よくまとまった好編といえよう。

〈佳作〉

作品名「ふれあい記念日」 齋藤 恒義

生活の中で、障害児をもつ夫婦のやりきれない気持ちや苦勞、亀裂寸前の夫婦の絆の有り様を、小説的には少し愚痴っぽく直接的ではあるが、巧みに描いている。そんな夫婦が久しぶりで長女茉莉、障害のある次女梨恵と一家そろって総合福祉施設の園庭で開催された「ふれあい祭」に行き、旧友との回合や祭の盛り上がりとともに、夫婦の冷めた心も高揚し、互いに感謝し、新しい三つめ

の生命を願い始める。そして祭の喧噪の中で主人公たちは、互いに助け合う子育てもまだこれからも波風に襲われるだろうが、そんなときには、助けてね、と会場の人びとに願う。この作品は佳作ではあるが、障害児を持つ夫婦の気持ちを巧みに描き、読者に明日への希望を持たせてくれる一般の部（優秀作）に迫る佳編だ。

作品名「空に近い、あの場所で」 永尾 美典

主人公リコは、友だち二人と下校途中にダンブを運転する父に出会ったが、仕事の差別はないと心の中では分かっているのに、理不尽な苛立ちを覚えて知らぬ振りをしてしまう。帰宅した父は何の屈託もない様子で接してくれる。リコは内心、反省しきりだ。TVのドラマなどでは、いつも大型トラックが加害者という定番が横行している。そんな職業の類型化に腹立つリコなのだが、父が寂しく思っているらしいことは内心分かっているのに、素直に謝れないでいる。

次の朝、父へ弁当を届けることになった彼女は、工事現場できびきびと働く父の姿に感動し、働く人びとの群れを美しいと思う。久しぶりで父と弁当を食べた。昔、夏休みなど学校の休みの日に現場に弁当を届けることはリコの仕事だった。現場をよく知る父はリコを一番涼しいところに連れて行き、一緒に弁当を食べたものだ。あるとき、父に弁当を届ける途中で、リコは男子生徒にいじめられていた幼稚園からの幼馴染みカホを助けようとしたが、突き飛ばされて何もできなかった。足を擦りむき、涙のあとを残したまま、リコは父に弁当を届け、父は無言で大きな手で撫でてくれた。父の匂いをかいだ途端、リコは泣いてしまった。二人で弁当を食べたあと、父はダンブカーで送ってくれるという。ダンブカーの助手席は高く、空が近かった。

リコを心から愛してくれている、本当は大好きな父に、贖罪のつもりでごめんね、とリコは言った。この思春期らしい少女リコや愛情表現の下手な父親の気持ちの巧みに描かれていて、父の大き

な愛、いわれのない職業の差別、いじめ、労働の尊さなどを考えさせてくれる好編こうへんだった。

作品名「空を見上げて 微笑みを！」 小林 良之

この作品は障害のある長男光一を囲む幸子と茂と次男広樹の「家族愛」をテーマとする作品だ。「いのちの灯」「時の移ろい」「信念の果てに」「新生に向けて」という四小章からなる物語だが、一月5,000円という障害者労働の賃金問題などを考えさせる、視点の乱れが惜しいが、気になる作品。

作品名「雪と誓い」 小山 菜那

主人公レイラは大好きな祖母が亡くなってひとりぼっちになった。レイラは祖母が亡くなるとき、黒のドレスをまとった美しく、冷たい赤目の少女が、祖母の上に舞い降りて、祖母から光る玉のようなものを取り出し、闇に消えるのを見たのだ。レイラは我に返り、その少女を悪魔だと思った。貧しい暮らしのレイラは冬でも薄いワンピースで雪の降る寒い街角で靴磨きをして生活していた。しかし、寒さに倒れたレイラはあの赤目の少女に助けられる。レイラは思い切って聞くと、彼女はレヴィアという250歳の悪魔であることを認めた。地獄の大魔王の言いつけで死ぬ人の魂を取り行くのだという。もしリストに上がった魂を取らなかつたら、その悪魔は消えてなくなるといふ。このごろレイラはめまいがますますひどくなった。そしてレヴィアはリストにレイラの名前を発見したのであるが、ついに魂を取らずに自分が犠牲となり、光となって消えた。レイラの靴磨きは彼女のフルート演奏を応援してくれる人もいて順調だった。

レイラはやがてフルート奏者として入団した楽団の団員と結婚し、子どもを産んだ。緑色の目の

ふたりから生まれた愛らしい赤ちゃんの目は赤い目をしていた。少し視点の乱れはあるが、健気に生きる少女と可愛い悪魔の心の交流を描いた児童文学的物語だ。レイラのやさしさにほだされて生きる喜びを知ったレヴィアの心の解放、レヴィアの生まれ変わりを思わせる赤ちゃんの意外性にも富んだ、とてもメルヘンチックで透明な作品だった。

【随想部門】

審査委員 三浦 暁子

《審査総評》

今年度、随想部門には944作品の応募があった。このうち、学齡児童生徒の部は883作品であり、一般の部は61作品であった。昨年に続き、たくさんの作品をお寄せいただき、感謝している。一般の部は力がみなぎる作品が多く、審査委員としての喜びを感じた。学齡児童生徒の部も、チャレンジ精神あふれる作品が多く、頼もしいと感じた。大人になる前の柔らかな頭脳を駆使して、思いのたけを綴ろうとする作品が多いことに驚きながらも、指導にあたる先生のご苦勞を感じないではいられなかった。「のじぎく文芸賞」をきっかけとして、書くこと、読むことを苦痛ではなく、喜びと感じるようになって欲しい。

〈最優秀賞〉

作品名「イルカの詩」

小野 まゆみ

脳腫瘍のため、手術や入院を繰り返した娘への思いを綴った作品である。幼い頃にイルカと泳ぐ体験をした娘は、イルカの調教師になるという夢を抱く。それは大人になっても変わることなく、母親の心配を受け付けないほど強いものとなっていた。水族館で実習中、まともに歩けないほど疲勞しても、泣き言も言わず頑張り抜く娘。そんな姿に打たれ、いつしか一番の応援者になっていく母親。それは娘の独立とも重なり、読む者の心をとらえる。娘はイルカの死には二種類あることを母親に教える。一つは生きる努力をしながらも事故などによって溺死する場合、もう一つは年老いた老イルカが自ら呼吸を止め窒息する場合だ。その過酷な現実が、死を見つめて生きる母と娘に重なっていく。

〈優秀賞〉（一般の部）

作品名「そんなん分かるやん」

大橋 克子

小学生の頃、少年野球チームに入っている息子のために、母親当番を経験したときのエピソードである。楽しく、教えられることが多い毎日が、目の前で本当に練り広げられているように感じた。とりわけ、チームの中に一人だけいた女の子へのまなざしが温かい。作者は、一生懸命に野球に打ち込む女の子の姿に打たれていたのだが、ある時、気づくのだ。彼女の耳が聞こえないことに……。けれども、チームメートに助けられ、集合を知らせる笛の音が聞こえなくても、号令の順番がわからなくても、女の子はきちんと役目を果たすことができるのだ。仲間うちだけで通じる手話を使い、自由自在にコミュニケーションを繰り返しているからだ。あり得ないことをなんなくやってのける子供の力に驚きながら、本当の優しさとは何かを示している。

〈優秀賞〉（学齢児童生徒の部）

作品名「自分らしくいること」

永井 魁

生まれつき、言葉を発するのに困難が伴う作者。もちろん、わざと変なしゃべり方をしているわけではない。ただ、一生懸命になればなるほど、言葉が詰まったり、引きのばしたりしてしまうのだ。兄も同じ吃音に悩むため、両親、とりわけ母親の悩みは深刻である。それでも、家族の温かさにささえられ、家にいるときはコンプレックスに悩むことはない。しかし、学校では、時にかかいの対象となり、悲しい思いをしなくてはならない。吃音を自分らしさとして受け入れるまでの心の動きが丹念に描かれ、饒舌な文章を楽ししいと感じた。

〈佳作〉

作品名「大根と冬瓜」

柴田 真理子

台所で料理する音や匂い、そして、故郷への切ない感情が原稿用紙から立ち上ってくるような作品である。今は亡き母の作る料理は、美味しいと同時に、滋養になることを目指していた。沖縄出身であった母は、沖縄が日本に返還される前は、パスポートを携行しなければ、故郷に帰ることはできなかった。それでも、母はたくさんのお土産をかつぎ、苦勞して、帰省した。不発弾を掘り起こすなど、危険な仕事に従事する若者を慰勞したかったのかもしれない。沖縄という存在について、深く考えさせられる作品だった。

作品名「さあ、今日も心のハイタッチを！」

塚口 佳子

アルツハイマー病にかかった夫との毎日が、端正な文章で書かれている。闘病が始まった頃は、自分ですべてを引き受けなくてはという決意にとらわれ、追い込まれるような悲壯感が漂う。しかし、毎日、毎日の奮闘が周囲の優しさをよびこみ、しだいに、心のハイタッチと言うべき状況を作り出す。誰もが抱える問題に真面目に取り組んで、身をもって戦ってきた作者に深い敬意を表したい。

作品名「日本じゅうの『もらいっ子』さんたちへ」

中川 幸代

思い切ったタイトルであるが、作者本人が、養女として見ず知らずの家へ引き取られて育っただけあって、説得力がある。本当の両親が養育しようとしなかったために養女となったことや、23歳までは養父母の配慮によって本当の両親と思って育ったこと、さらには、実母が再婚してから生まれた妹がメッセンジャーとなって本当のことを伝えたことを、包み隠さず告白している。それも、

深刻がらずに、ユーモラスに書こうとする。周囲に感謝の心を失わない作者の態度に励まされる。

作品名「まずは『知ること』から」 中野 晶

北朝鮮の拉致問題について、真面目に、必死に考えた作品である。横田めぐみさんのお母さまの早起江さんの著書を読み、家族の思いと寄り添うよう努力する姿が目に見え、私達ひとりひとりが考えるべき問題とする結論に深くうなづく方が多いだろう。

作品名「じんけんさくぶん」 みき みのり

小学校1年生でも、人権というものを考え、それを文章にできることを教えられた。母親への問いかけを繰り返しながら、自分なりの感想を持つところ、人権を考えるヒントが隠されているような気がしてならない。学校教育も大事だが、家庭の教育には無限の可能性があるので、幼いながら知っているかのように。

《審査総評》

詩はとりわけ言葉の力が問われる分野。言葉の力とは、思わず作品の中に引きこまれるような心のふるえを呼び覚ます力と言うことができる。人権にかかわるテーマの作品の場合は、なおさら言葉に心が通っていないければ、言葉の力は生まれない。

今回はそのような、自らの経験を通して目で見、耳で聞き、身体で感じとったことを題材にした作品を多く読むことができた。欲を言えば、さらに感情を深めていくために、言葉をもっとつきつめていく作業が必要ではないかと感じた。

その点からも、「サクラのきょうだい」は群を抜いてすばらしい作品と言える。

また、社会に対するまなざしを題材にした作品が少ないのが気になった。

〈最優秀賞〉

作品名「サクラのきょうだい」

入江 輝脩

祖父母が、孫である作者とその妹の誕生を記念して植えた二本のサクラについて書いた作品。二本のサクラは、そのまま兄と妹の分身であり、二人がそれぞれのサクラを自慢しあうことで、春夏秋冬のサクラの表情が生き生きと表現されている。もう一つ、この作品が面白いのは、ここには作者と妹しか登場しないが、二本のサクラを見ている兄妹の後ろで、そのサクラを孫のように愛情を注いで手入れしている祖父母が見えてくること。自分たちの誕生を心から喜び、サクラを植えてくれた祖父母が、言葉の後ろにいてることを感じさせるのは、二人が、家族という見えない愛情で包みこまれているからに違いない。

〈優秀賞〉（一般の部）

作品名「風になる」 中下 重美

短い作品だが、第二連の「風になる」のリフレーションがよく効いている。視覚障害者のマラソン大会を見て作者が感じとった思い——視覚障害者と伴走者との心のつながりの深さと強さが、二人の大地を蹴るリズムを通してひしひしと伝わってきたのだらう。

そして最終連で、作者は心の中で、この二人のランナーと一緒に走っていることに気づくのである。短い言葉で簡潔に、しかも躍動感のある言葉が、そのまま作者の感動を伝えている。

〈優秀賞〉（学齡兒童生徒の部）

作品名「サギの親子」 内藤 廉哉

ザリガニ採りに田んぼに行った時に、二羽のサギに襲われるという体験を書いているのだが、サギが襲ったのは、自分たちがサギの巣に近づき過ぎたためなんだと気づくところがすごい。卵やヒナを守ろうとして自分たちが飛んできたのだとわかった。そこから自分たちの親も、このサギと同じように命懸けで自分たちを育ててくれているのだという感慨を抱く。「こわくてどきどきしていたばかりの心の中がほわっとあたたかくなった」という表現がよくその実感を伝えている。

〈佳作〉

作品名「蕎麦の畑で」 田井 芳枝

なんとも言えないユーモアと、卒寿を越えて「山また山の過疎の村」に一人で暮らす作者の母親への思いがたつぷりと伝わってくる。「背筋はピンと一人で暮らす」母に「七十なんてまだ若いよ」と「あべこべに／＼元氣をもらって戻ってくる」と書いてはいるが、内心は母が心配なのだ。「ゆっく

り、ゆっくりね」と「呪文のように唱えてから戻る」というところに、それがあらわれている。母から娘へ、娘から母へ、それぞれの「思いやり」が素直に伝わってきていい作品だ。

作品名「アザーボイスズ」 いなみ しんじ

社会に対する鋭いまなざしを詩で表現する作品は意外に少数だった。中でもこの作品は、社会の歪みをとらえるだけでなく、「細いいのちづなを懸命ににぎりしめ／毎日を必死で生きている」人たちに対してどう向き合うのかというところまで踏み込んでいる。「アザーボイス」とは、そのような少数者の声、障害者であったり、ひとり暮らしの老人であったり、いじめに苦しむ子供であったり、ホームレスの人たちであったり、そのような人権を脅かされている人々の「小さな声」を指すのだろうか。そのような声に「耳をかたむけ／心を添わ」せることから始めようと作者は言うのである。

作品名「素直になれたら」 大西 泰輝

自分の実体験を直接作品にしたものではなく、自分の思いを書いているのだが、言葉に力があることに魅力を感じた。「素直になる」には「勇気」が必要なんだということを、常日頃から思っているからこそ出てきた言葉だから、言葉に強さがあるのだ。読んでいて気持がよく、前向きな心に読み手を引き込んでいくところがいい。

《審査総評》

本年度の応募作品は、一般の部34編、学齡児童生徒の部2編の計36編であった。児童生徒の作品は例年より少なくやや寂しいが、一般の部はこれまでになく多数の応募がありうれしく思った。作品の題材もいじめとか障がい者に対する問題だけでなく多彩な内容が取り上げられ、人権問題に対する関心が広がり高まったことがうかがわれた。作者の年齢も80歳を超えた方の作品から高校生の作品まで各年齢層に広がっており楽しく読ませていただいた。とりわけ、8歳の児童の作品が寄せられていたのはうれしかった。

今後ますます人権の視点から物を見て、それを童話作品として創作しようとする意欲が高まっていくことを心より期待したい。

〈最優秀賞〉

作品名「お母ちゃんの力こぶ」

石川 純子

お父さんに感謝の手紙を書きなさいという父の日の宿題に対して、奈々子はひどく腹を立てていた。奈々子には保育園のころ両親が離婚して父はいないからだ。母は仕事を二つも持って奈々子が4年生になる今日まで懸命に働いてくれていた。その母の頭に白髪がまじりはじめているのを見て、奈々子は母に対する感謝の気持ちを作文にした。そこには保育園のころ母と動物園に行ったとき、お父さんに肩ぐるまされている子をうらやましく見ていると、突然母が肩ぐるまをしてくれたことが書かれ、お父さんみたいに力持ちのお母さんが大好きと結ばれていた。その奈々子の作文をめがねをかけて読み終わった母はいきなり右手に力こぶをつくってみせた。母子の気持ちが巧み

に描かれた心ひかれる作品である。

〈優秀賞〉（一般の部）

作品名「心の色」 藤本 忍

2年生の亮は、交通事故で右足の膝から下を切断、松葉杖での歩行である。姉の私は亮が1年間の入院とりハビリを終えて登校できると知ったとき、「私が亮の送り迎えをする」と言ったのだが、それが日常となると煩らわしくなることもある。ハイキングのときなど特に大変で、みんなから遅れてしまい、困っていると、功太がひき返してきて亮をおぶってくれた。普段、みんなは乱暴者の功太をあまりよく思っていないが、私は功太の優しさを知ってとてもうれしくなった。

弟の世話をやく私の心情を描きながら、友達の親切にふれて自分を一層高めようとする私の気持ちを描かれていて心あたたまる作品である。

〈佳作〉

作品名「かくれんぼ」 森園 順子

大好きなママが亡くなったショックで話ができなくなったさえちゃんは幼稚園でも一人できるところが多くなり友達もさえちゃんから離れていった。ちかちゃんだけが友達で、さえちゃんがやけどをしたときも家へとんで帰ってアロエをもってきてくれたりした。そのちかちゃんは「さえちゃんの声、かくれんぼしているのや。もうすぐ出てくる」と思っていた。それは、おばあちゃんもお姉ちゃんも待ち望んでいることだった。言葉がでなくなったさえちゃんを温かく見守る人たちの気持ちがよく表現されていて好感のもてる作品である。

作品名「やさしい心」 齋藤 向日葵

みんなは太郎くんに花の水やりを押しつける。しかし、太郎くんはそれをいやがらずに花の水やりを続ける。花はみごとに咲いて、毎日水をくれた太郎くんに礼を言う。やさしい心を持っている太郎くんにはその花の言葉が聞こえるのである。しかし、花と話をしている太郎くんを見て、みんなは笑ってばかりにする。

しかし、花壇の花が満開になり花の香りが一面に広がっている日、花のブーケづくりをしていると、みんなの耳に花の声が聞こえてびっくりする。花の声はやさしい心をもっているひとにしか聞こえないからである。

やさしい心はみんなもっているが、それに気づかないことが多く、それが他人にいじわるをしたり、相手を嘲笑したりする行為につながっていることに気づかせようとした作品といえる。

作品名「ゆきの幸せ」 古谷 千歳

ゆきは12歳の誕生日に叔父夫婦の養女になる。しかし、ゆきは家族と別れたことが辛く毎日寂しい日々を過ごす。さりとて「家に帰りたい」などとは何かにつけて心配りをしてくれる叔父夫婦には言えず辛い日々を自分で気をまぎらしながら過ごす。やがて自分の本当の気持ちを叔父・叔母に話すと叔母がゆきの肩を強く抱きしめてくれた。本当の家族になるために何が必要なのかを問いかけた作品である。

作品名「やみ色のヒツジ」 田邊 和代

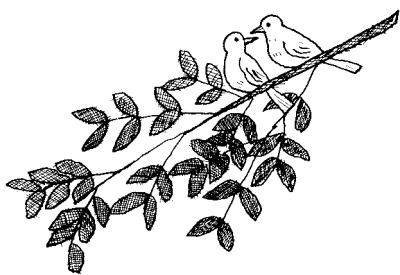
ヒツジのキオは黒色の毛としゃがれた声のためにみんなから仲間はずれにされバカにされてとて

も悲しい気持ちになっていた。そんなある日、オオカミが現れてヒツジたちをとらえて暗い洞窟に放りこんだ。キオだけが黒色の毛のためにオオカミには気づかれなかった。キオは洞窟に近づきカギをあけてとらえられているヒツジたちを救い出した。物語の展開はやや月並みであるが、作者の今後の創作への意欲に期待して佳作とした。

作品名「雨の中で出会って」 高木 里朋

希望をもつて生きることの大切さを訴えた作品と言える。悲しくてとても辛い雨の日、おばあさんとの出会いから私の気持ちは変わっていく。弟と買物に行った帰りに弟は交通事故にあい意識不明のまま病院に運ばれた。どうしていいか分からないとおばあさんに話すとおばあさんはあなたとあなたの両親が希望を捨てずに励まさないといけないと言う。そのことを両親に話して実行してみると不思議にも弟が目を開けた。

弟が退院したあと、おばあさんに礼を言いにいくと、おばあさんはいなかった。しかし、家のドアには「よかったね。これからはなんでも希望を持ち続けてください。あなたに雨の中で出会えてよかった」と張り紙がしてあった。



最
優
秀
賞

《最優秀賞》

小説部門

マユミおばちゃんの唐揚げ

高木 浩志

形よく三角形に握られた四つの大きなおにぎりには、そのどれもに、種を取り除いた赤い果肉だけの梅干しが入っていた。

保冷剤は、すっかり解けてしまい、柔らかくはなっていたけれど、おにぎりは、まだほんのりと冷たかった。昨夜、マユミおばちゃんが作ってくれたおにぎりだ。小さな保冷バッグに、丁寧にラップで包まれた四つのおにぎりが入っている。海苔も湿らないように、一枚一枚、ラップで丁寧に包まれていた。

昨夜、僕は、閉店間際のマユミおばちゃん

のお弁当屋に駆け込み、この四つのおにぎりが入った保冷バッグを受け取ったのだった。

マユミおばちゃんは、店の後片付けをしなから、閉店の時間を延ばし、僕を待ってくれていた。

「おばちゃん、ごめーん、遅くなったあ」
僕は店の前で自転車を止め、厨房で後片付けをしているマユミおばちゃんに声をかけた。

フライヤーの油の火はすでに止められていて、いつものような厨房から漂う揚げ油の甘い匂いは感じられなかった。

「お家に帰ったら、冷蔵庫に入れといてね。朝、凍った保冷剤をこの保冷バッグに入れて持っていくねんよ。この暑さやなかったら唐揚げとかおかずも入れてあげられるけど……」

おにぎりを差し出したマユミおばちゃんの指先が、梅干しの色素で赤く染まっていた。

「でもね、今日はおにぎり四つにしたいから。おにぎりだけで、ホンマにごめんね……」

その代り、入賞したらご褒美に、大好物の唐揚げをお腹一杯食べさせたげるからね！」

通常の売り物のお弁当ではないおにぎりを、仕事の手を止めて、わざわざ作ってくれたというのに、マユミおばちゃんは、申し訳なさそうな顔で、そう言った。

「僕の方こそ……。いつも、ありがとう」

秋から春までの寒い時期の試合では、おにぎりの他に何品かのおかずも付けてくれている。けれども、この暑い時季だから、前夜に作るという条件では、調理のプロとは言え、マユミおばちゃんはおかずには頭を悩ましたに違いなかった。僕が中学校の陸上競技部に入部してから、試合の日にとって行く弁当をマユミおばちゃんに頼むことが多い。

自転車に跨り、僕が店の前を走り出そうとした時、

「明日の決勝、頑張んねんでえ！ おばちゃん、祈ってるからねえ……」

と、マユミおばちゃんの声が背後から聞こ

えた。僕は、振り返るのが照れ臭くて、聞かないふりをして自転車を走らせたのだった。

僕は、陸上競技場のスタンドで、そのおにぎりが入った保冷バッグを鞆から取り出した。

僕たちの中学校が陣取っている一角は第三コーナりの位置で、校名が印刷された屋根だけのテントを四本の支柱で建て、夏の強い日射しをしのいでいた。各学校ごとにスタンドのどこかの位置を陣取り、その陣取った場所を自分たちのダッグアウトとしている。

僕の出場する《男子八百メートル》の決勝は午後四時からだ。この決勝レースで入賞すれば、近畿大会に出場出来るのだ。

県大会初日の昨日は午前中に予選があり、僕は余裕を持って予選を通過していた。予選は通過出来る自信が密かにあった。だから、緊張もほとんどなかった。けれども、今日の決勝では、入賞出来る自信などなかった。

朝、この陸上競技場に着き、僕は隣接する練習場でウォーミングアップを済ませた。競技に出場する選手は自分の種目の開始時間に合わせて、この練習場でウォーミングアップをするのだった。僕は軽くジョギングをした後、入念にストレッチをし、身体が解れたところで再び陸上競技場に戻り、自分たちの学校が陣取っているスタンドに腰を降ろした。そして、早めの昼食を摂ることにしたのだった。

早めの昼食を僕に勧めたのは、昨日の走幅跳で予選落ちした里志だった。里志は昨日自分が予選落ちした落胆を微塵も見せず、出場しない今日も、この陸上競技場に来ている。

「早めに食べて、胃が落ち着いたら、俺が脚のマッサージしてやるからな。今日もおばちゃんの弁当やろ？ 早よ、食べろよ」

練習場に現れた里志は、僕にそう言ったのだった。競技の時間から逆算して、冷静に時間配分を計算してくれている。

緊張感と不安と暑さのせいで空腹感は今くなかったけれど、マユミおばちゃんの力を借りた、と、思わずにはいられなかった。そのために、母には申し訳ないと思いつつ、僕は、無理を頼んでマユミおばちゃんに今日の試合での弁当を頼んだのだ。

丁寧に包まれたラップを捲り、これも丁寧にラップで包まれた海苔をおにぎりに巻く。海苔は乾いた感触を残している。僕は、海苔の部分の指で持ち、マユミおばちゃんが作ってくれたおにぎりを食べ始めたのだった。空腹感がなかったはずなのに、食べ始めると、おにぎりは一つ二つと減っていく。塩加減がちょうどいい。

僕は、おにぎりを一つ食べてはペットボトルの麦茶を飲み、また海苔を広げ、次のおにぎりに巻いていくのだった。

「おばちゃんのおにぎりは日本一やろー！」
冷かすような里志の声が、だしぬけに背後から聞こえた。

「里志も、一個、食うか？」

僕は、振り向きながら里志におにぎりを一個差し出した。

「欲しいけど…、いらん。おばちゃんがお前のために心を込めて握ったおにぎりや。全部食って、お前が決勝、頑張らなアカンやん」

里志はそう言って、僕の肩をポンと叩いた。「今日もマッサージ頼むわ。もしかしたら、里志にマッサージして貰うのも今日が最後かもな」

僕はおにぎりを頬張りながら、そう言った。「何を言うんや！俺は昨日で終わってしもたけど、お前はまだ近畿大会があるやん！」

総合体育大会は、地区レベルの県大会から近畿大会、そして、全国大会へと進む。もちろん、勝ち進まなくては、その段階で中学生生活のクラブ活動が終わることになる。走幅跳を専門種目とした里志は昨日の予選で敗退し、中学生生活での公式試合を終えたのだった。

里志とは、中学校に入学して以来、専門種

目は全く違うけれど、同じ陸上競技部で汗を流した仲だ。中学校に入学した時、どの課外クラブに入学しようか迷っていた僕を陸上競技部に誘い込んだのは里志だったのだ。

「お前のマッサージをするまで、まだ少し時間あるから、ちょっと棒高でも見てくるわ」

そう言い残して、里志は棒高跳びのピットの方へ走り出した。僕たちの学校からは神田が棒高跳びの決勝へと進んでいる。

僕は、四つ目の最後のおにぎりを平らげ、ペットボトルの麦茶を飲み干したのだった。

※ ※

マユミおばちゃんの店は、たくさんのレストランが行き交う幹線道路の大きな交差点から少し西に入った位置にある。黄色い看板テントが目立つだけの弁当屋だった。間口三メートルほどの広さの店で、外扉がなく、シャッターを開けると、いきなりカウンター

と硝子で覆われたショーケースが現れる。ショーケースの中には蠟で作られた弁当のサンプルが六、七十種類ほど陳列されていた。

カウンターの向かつて右端にレジスターがあり、マユミおばちゃんは店内の厨房とカウンターを何度も何度も小走りで往復するのだ。弁当を作ってはお客さんに手渡し、代金を受け取る。軽業師のように手際がいい。

僕が、マユミおばちゃんのお弁当屋に初めて連れて行ってもらったのは、小学校の低学年の頃だった。

看護師をしている母が、僕の小学校入学を機に、それまで断り続けていた病棟での夜勤を引き受けるようになり、週に一度くらいの割で、母の夜勤はやってきた。

母が夜勤の日は、逆に父は残業を控えて、仕事が終わるとすぐに帰って来て、出勤前の母が用意してくれている僕と二人分の夕飯をレンジで温めるなどしてくれていた。

しかし、父も、夜勤の出勤前に二人分の夕飯を準備しなければならぬ母を氣遣ってか、はたまた、自分も食べ終えた夕飯の後片付けなどが煩わしかったのだろうか、いつしか、母の夜勤の日はマユミおばちゃんのお弁当屋に夕飯を買いに行くようになった。

「好きなもん、頼め。何にする？　ぎょうさんあるから、迷うなあ」

ショーケースに並んでいるメニュー以外にも、サービスマニューと名付けられたサンプルのない安価なメニューがたくさんある。合計すると百種類くらいの弁当のメニューがあった。

母の夜勤の度ごとに、父は会社から帰ると、僕を連れてマユミおばちゃんの店に行くのだが、時折、「今日もおばちゃんの弁当屋でいいのか？」などと、僕に聞くことがあった。

僕は、「ええよ！」と、迷いもなく答えるのだけれど、マユミおばちゃんの弁当屋でいいのか？　僕には、マユミおばちゃん

の弁当屋がよかったのだ。

百種類ほどのメニューの中から一品を選ぶのは迷うばかりだったけれど、迷うのも僕には楽しかった。

いつしか、母のいない父と二人だけの夕飯が、僕には楽しみになっていったのだった。

「もしお迷いでしたら、お好きな言って下さいね。リクエストにお応えして、オリジナルな弁当をお作りしますよお」

初めて弁当を買いに行った時、父子で迷っている姿を見かねてか、マユミおばちゃんは笑顔でそう言った。

「オリジナル弁当……ですかあ？」

父は怪訝な顔をして、マユミおばちゃんに聞き返した。

「そうです！ メニューにもありますけど、〈ハンコロ〉って、ハンバーグとコロツケなんですよ。〈カラコロ〉は唐揚げとコロツケ。その要領で、例えばあ……エビフライとオムレツ

で〈エビオム〉ってどうですか？ それに、

うちはご飯の大盛りはサービスなんですよ」

父とマユミおばちゃんの会話を聞いていて、僕は次々に現れる片仮名四文字が面白かった。

「でも、迷うばかりで……。迷うから、シンブルに〈幕の内〉します。で、光一は、何にするねん？」

「光一君って言うの？ じゃあ、光一の〈コーちゃん〉やね。コーちゃんは何弁当にするう？」

マユミおばちゃんは屈託なく笑って、初対面の僕をいきなり〈コーちゃん〉と呼んだのだった。

「ほんなら、ボクう、唐揚げとエビフライで〈カラエビ〉！」

僕がそう言くと、マユミおばちゃんは、誰もいないはずの店の奥に向かって、

「はい、コーちゃん〈カラエビ〉、お父さん〈幕の内〉！」

と、言い、僕たちの方を振り返ると、照れ隠しのように舌を少しペロっと出した。

「誰もいなかったですよ」と、

頬を少し赤らめて独り言のように続けた。

「おばちゃん、一人でお仕事してるの？」

大きな海老に衣をつけているマユミおばちゃんに、僕はそんなことを話しかけたのだった。

「パートさんと二人でお仕事してるんよ。パートのお姉さん、今、自転車で配達に行ってるのよ」

その日以来、僕たち父子はすっかりマユミおばちゃんの弁当屋のファンになり、常連客になった。母までもが、時折、マユミおばちゃんのお店で、おかずだけを買うようにもなり、家族そろって頻繁にマユミおばちゃんのお弁当屋を利用するようになったのだった。マユミおばちゃんは、時折、賄い^{まかな}で食べるための煮物などを小さなタッパーに入れてくれたりした。看護師をしている母を氣遣つてのこと

だろうけれど、母も母で、要領よく、父にはマユミおばちゃんから頂いた煮物だとは言わずに皿に移し、食卓へ出したりしていたのを覚えていた。

おそらく、弁当の味だけではなかったのだろう。他のお弁当屋に比べたら、平均して五十円から百円ほど高い金額設定だった。けれども、マユミおばちゃんの親しみのある優しい笑顔と手作り感のある弁当が、僕たちの口と心を引き付けて離さなかったのだった。

「おばちゃん的笑顔、菩薩^{ぼさつ}のようやな」
独り言のように、父が呟いた事があった。

※ ※

いつも元気で朗らかなマユミおばちゃんに、僕は一度だけ叱られたことがある。

いやそれは、叱られたと言うより、いつも優しい笑顔で僕を迎えてくれるマユミおばちゃんを、悲しくさせてしまったのだった

……。

小学校五年生の秋の頃だった。母の夜勤の日は、決まってマユミおばちゃんの店で夕飯のお弁当を買うようになり、次第にマユミおばちゃんと親しく話をするようになっていた。

最も忙しい昼前後と、夕方からの忙しくなる時間の間の時間帯が、小学生だった僕の下校時間だった。ちょうど弁当屋の客が途切れる時間になる。マユミおばちゃんは、店の奥で休憩をしていたり、夕方からの注文に備えて下拵えくみづかいをしていたりすることが多かった。

僕はたいてい、下校の途中でマユミおばちゃんの店に立寄り、学校であつた出来事や、宿題のこと、給食のおかずのことなど、他愛無い話をするようになっていた。

マユミおばちゃんは、僕が店先に現れると、忙しいはずなのに、カウンターの所まで出て来て、嫌な顔ひとつせず、いつも優しい笑顔で僕の話聞いてくれるのだった。

その日も僕はいつものように、学校からの帰りにマユミおばちゃんの店に立ち寄った。

「おばちゃん！」

マユミおばちゃんは、流し場で幾つものフライパンや鍋などの調理器具を洗っていたけれど、僕の声を聞くと、その洗い物の手を止め、エプロンで手を拭きながらカウンターの所まで来てくれた。

「お帰りの。今日は、いつもより、ちょっと遅いんじゃない？ 今日のコーちゃん、来ないかなあ、って思ってたん……。んん？ もしかして、先生に叱られたったん？」

おばちゃんは、僕をからかうように笑った。僕の好きな揚げ油の甘い匂いがした。

「これ、飲むうー？」

マユミおばちゃんは食材が詰まった大きな冷蔵庫から乳酸菌飲料を取り出し、僕の前に差し出した。

いつの間にか、僕が毎日のように学校の帰りにマユミおばちゃんのお弁当屋に立ち寄る

ようになって、いつの頃からかマユミおばちゃんは、駄菓子とかジュースとか、夏にはアイスクャンデーなどを僕にくれるようになったのだった。

「さっき、配達員のお姉さんが昼ごはんのお弁当を買いに来てくれてん。その代わりに、おばちゃんも、買ってあげたんよ。コーちゃんが来たら一緒に飲むって思ってた……」

「ありがとう」

「苺とレモン、コーちゃんどっち飲む？」

「レモン！」

僕はストローを突き刺し、一気に三分の二くらいまで飲み、

「そんなにとちゃうよ！ 先生に怒られてなんか、ないでえ！」

と、話を戻した。

「そうやわなあ、コーちゃんの顔、元気そうやもんね。コーちゃん、いつも学校の帰りにお店に寄ってくれるし、お母さんが夜勤の夜はいつもお弁当買いに来てくれるし、おば

ちゃん、コーちゃんの顔見てたら何でもわかるわあ。ほんで、何かええことでもあったん？」

マユミおばちゃんは何度も大きく頷き、笑った。一人合点したように大きく頷くのはマユミおばちゃんの癖だ。

「学校終ってからオモロいこと、あつてん！」
「何？ 何があつたん？ おばちゃんに聞かせてえ」

マユミおばちゃんは、僕に顔を近づけてそう言った。

「それがなあ、学校の帰りに、工事現場の所で、里志って言うヤツが騒いでてん」

運送会社の倉庫と、パイプを作っている工場の間にあった月極めの駐車場が壊され、新しく建物が建設されようとしていた工事現場だった。

「里志君って？ 同級生なん？」

「うん。同じクラス……」

「で、何を騒いでたん？」

マユミおばちゃんは、少しでも身を乗り出すようにして、目を見開いた。

「工事現場、今、工事してないから、トラックもおっちゃんらも来えへんねん。そやから、僕ら、大丈夫やと思つて近道に工事現場の横を通るねんけど、今日も工事現場の所を通ったら、里志と里志の妹が先におつてな、『シロが落ちたあ！』つて騒いでるねん」

「『シロ』つて何？」

「里志んとこの犬。ミニチュアダックス」

「もしかして、犬が穴にでも落ちたん？」

「そう！ 里志の妹はまだ二年なんやけど、僕らより早く学校終わるから、先に帰つて、犬の散歩させて遊んどったら、リード外れて逃げ出しよったらしいねん。そんで、工事現場の方に逃げて、大きな穴に落ちよつてん」

建設業者の都合か、僕たちにはわからない何かの事情で、一週間ほど前から建設工事は中断されていたのだった。

「あらあ……」

マユミおばちゃんは、眉間に皺を寄せ、急に顔を曇らせた。

「今、大騒ぎしてる。里志んとこ、今日はお母さん出かけてておらへんから、兄妹で半泣きやつた」

僕は、三分の一ほど残っていた乳酸菌飲料をジュジュつと音をたてて飲み干した。

「深い穴なん？」

「大人の人の背えくらいかなあ……。そんなん、ミニチュアダックスが上れるわけあらへん」

その大きな穴は周囲を「安全第一」と書かれた橙色と黒のフェンスで衝立のように覆われ、囲まれていたけれど、里志が飼っている犬は、そのフェンスの下のわずかな隙間を掻かい潜り、誤つて穴に落ちたらしかつた。

「助けたげな、あかんやん！」

マユミおばちゃんは、小さな目をぎゅつと大きく開いてそう言った。

「そやけど里志つて、偉そうにしてて、意地

悪で、僕なんか、いつも苛められてるし…」

僕は、マユミおばちゃんの大きく見開いた目を避けるように、俯うつむいて小さな声で反論した。見慣れているはずのショーケースのサンブルの幕の内弁当を意味もなく僕は見ていた。

「けど、『シロ』っていうワンちゃんには、苛められてないやん！」

マユミおばちゃんは、カウンターを手の平でポンと一回叩いた。

「当たり前や！ あんなチビの犬に僕が苛められるわけないやん！」

ふざけているのかな、と僕は一瞬思っただけで、カウンターを叩いた音がそれを打ち消していた。水仕事で荒れたマユミおばちゃんの指先と爪が目に飛び込んで来た。

「ほんなら、ワンちゃんは何んにも悪いことないやん。里志君って子が悪くても、ワンちゃん、穴に落ちたら可哀想でしょうが！ コーちゃん、助けようともせんと、おばちゃ

んとここに来たんかいな。それも、人の不幸を嬉しそうに報告に来たんや」

マユミおばちゃんは、大きく見開いた目を今度は細め、泣きそうな顔になったのだった。

「僕は、里志にいつも苛められてるねん。ざまあみろ！ って感じやな」

自分の正当性を僕はマユミおばちゃんに訴えようとしたのだ。

「コーちゃんって、そんな子やったん？」

コーちゃんは、その里志君に苛められてるかもしれないへん。里志君って子も悪いかもしれない。そやけど、ワンちゃんには関係ないんちゃう？ ミニチュアダックスが深い穴に落ちたら上がられへんやん！ 可哀想やん！」

マユミおばちゃんはそう言うのと、何か閃ひらめいたと言うような顔をして、徐おもむきに踵かかとを返した。調理台やフライヤーの間をすり抜けて店の奥へと小走りで消えた。そして、大きな買い物籠かごと太いロープを手に、カウンターの所へ戻って来たのだった。背の低いマユミおば

ちゃんは踏み台を利用して店の一番奥の大きな冷凍庫の上から殆ど使っていない買い物籠を取り出し、掃除用具入れからロープを出したのだった。

「そんなコーちゃんなんか嫌いやわ！ 里志君とのことはワンちゃんを助けてから話し合ったらええねん。まずは、里志君って子やなくて、里志君のワンちゃんを助けておいで！」

マユミおばちゃんは、買い物籠の把^とっ手にロープを強く括^くりつけた。

「その籠、何すんのん？」

「決まってるやん！ この籠を穴の下に垂らすねん。ほんでな、ワンちゃんがこの籠に入るのを待つねん。籠に入ったら、里志君と協力してロープを引っぱるねん」

「そんなん、イヤや！ なんで里志なんかと協力してシロを助けなあかんの？」

「コーちゃん」

マユミおばちゃんは情けなさそうな顔で、

懇願するようにそう言った。

「コーちゃん、早よ、行き！」

「でもお」

「コーちゃんが行かへんのなら、私、お店締めて自分で行くわ！ その代わり、もうコーちゃんにはお弁当作ったげへんから！」

「そ、そんなん」

「それなら、早よ、行きなさい！」

マユミおばちゃんは、ロープを括りつけた買い物籠をカウンター越しに押し渡した。

僕には「お弁当作ったげへん」と言う言葉に、自分が深い穴に落ちたような絶望感を覚えたのだった。

「ほな、行く……。そやから、またお弁当、作ってえなあ……」

僕は、小さな声でそう言うと、把っ手に括りつけられたロープを丸めて買い物籠の中に入れ、マユミおばちゃんの視線を背中に感じながら、それを持って工事現場へと走り出したのだった。里志と犬を助けるというのは僕

には不本意だったけれど、それよりも、マユミおばちゃんにお弁当を作って貰えなくなるのが何より悲しかったのだ。

妹と大きな穴を覗きながら、立ち尽くしていた里志は、大きな買い物籠を持って現れた僕に驚いたのは言うまでもなかった。

「これ、弁当屋のおばちゃんが……」

駆け寄る足音で振り向いた里志に、僕はそう話しかけた。あくまでも、自分の意思ではないと強調したくて、無意識にそんな言い方になったようだった。いかにも、僕はマユミおばちゃんの命令に従っているだけだ、と。

「これで、何するんねん？」

里志は、いぶかしそうな顔でそう言った。

「ロープをどこかに繋いで、籠を穴に入れて、シロが籠に入るまで待つて、籠に入ったらロープを引っぱればええ、って」

「弁当屋のおばちゃんがそう言うたんか？」

「そうや。おばちゃんがそう言うた」

マユミおばちゃんは、「里志君と協力して」

とも言ったけれど、僕には、里志にその言葉をつけ加えることができなかった。

「お兄ちゃん、ここに括って！」

涙で目を赤くした里志の妹が、近くに放置されたままの太い鉄骨を指差した。里志は僕からロープの括りつけられた買い物籠を奪うように取り、無言でロープの端を太い鉄骨に括り付け、買い物籠を物音をたてないようにそろりそろりとシロの落ちた穴に落し入れた。

自分たちが落ちないように用心しながら、里志につられて二人で穴の中を覗くと、シロは怯えたように自分に近付いて来た買い物籠を見つめていた。

「籠に入るかなあ」

ようやく泣き止んだ里志の妹が呟いた。

「シロ、入れ！」

里志が穴の奥に向かって叫んだ。けれども、怯えているのか、不安感が先に来ているのか、犬は買い物籠へは入ろうとしない。

「家に帰って、シロの餌、持って来たれ」

僕は、里志の妹にそう言った。単純に、食べ物で釣ることを思いついたのだった。

里志の妹が家からドッグフードを持って来て、一旦買物籠を引き上げ、中にシロの好きなドッグフードを少し入れて再び穴にカゴを落し入れてみた。すると、シロは、クンクンと鼻を鳴らし、短い脚を高くあげて餌に釣られるように買物籠に入ったのだった。

「今や！ ロープを引こ！」

僕はそう言つて、里志と二人でシロが入つてくれた買物籠を引き上げたのだった。

シロは、買物籠の中で暴れることもなく身を丸めていた。買物籠を引き上げたあと、安堵感で泣きながらその場に座り込んでしまった里志の妹は、何度も「シロ、シロ」と犬の名前を呼び、抱きしめた犬の頭を撫でた。

「アリガト……」

妹を見つめていた里志は、僕の方を振り返

ると蚊の鳴くような声でそう言ったのだった。

「おばちゃんに、この籠を返さな。お前も妹とシロ連れて、一緒に来いや！」

僕は、里志にそう言つて、太い鉄骨に括つたロープを外した。

※ ※

「おにぎり、うまかったやろ？」

僕の脹脛はらばきを丹念にマッサージしてくれている里志が唐突にそう言った。

「そら、うまいに決つてるやん。何やねん、今さら、急に……」

「おにぎりもうまいけど、俺はあの時、おばちゃんがくれた唐揚げが一番うまかったな」

「唐揚げ?？」

「そうや。シロを助けた日に、おばちゃん、俺らに唐揚げを二個ずつくれたやん……」

「そうやったかなあ。俺はおばちゃんの店の

唐揚げ、食い飽きるほど食ってるから……」

僕は恍^{とほ}けたふりをしたけれど、あの時の唐揚げの味と、マユミおぼちゃんの嬉しそうな笑顔を鮮明に覚えている。

「忘れたんかあ？」

穴に落ちたシロを救い出し、里志と里志の妹、そしてシロを連れて、マユミおぼちゃんに救い出した報告と貸してくれた籠とロープを返しに行った時だった。マユミおぼちゃんを目を潤ませて、「よかったわ。ホンマによかったわ」と、自分のことのように喜んでくれた。

そして、唐揚げを七つ僕たちに差し出した。「よく頑張ったからご褒美。一人二つずつ食べなさい。それで、余った一つは、油のない中の部分だけ千切って、ワンちゃんに食べさせたらいい。皆な、仲ようすんねんでえ！」僕も里志も昨日のことのように、思い出したのだった。

里志の手の平は、僕の脹脛^{ふくらはぎ}から太ももへと、

慣れた要領でマッサージを繰り返していた。

「昨日、里志の予選の前に、俺もお前の脚のマッサージしてやれてたらよかったなあ。ちょうど、俺の予選の時間やった。走り終えた頃には、お前はもう走幅跳びのピットに行ってた……」

「それでよかったんや。光一にマッサージしてもろてたら、予選落ちの言い訳が出来へんがな」

芝生の上に寝ころんでいた僕の後頭部の辺りで、里志の甲高い笑い声が聞こえた。

「そんなん言うなや。俺かって、入賞出来へんかったら、言い訳のネタがないやん」

「そうや。おぼちゃんのおにぎりを食べて、俺がマッサージしたんや。もうお前は入賞するしかない！ 言い訳は必要ないでえ」

里志の言葉に勇気を貰い、僕は、四時から始まる八百メートル決勝レースのスタート地点に向かったのだった。緊張と不安が消えた。

「うちの息子と娘、サッカー部とバレー部
やったから、陸上部ってあんまり知らんねん。
里志君の走幅跳って、おばちゃんもわかる
わあ。おばちゃんも、昔、体育の授業でやつ
たもん。でも、コーちゃんの八百メートルつ
て、ピンとけえへんわ。中距離走？ 駅から
このお店までが一キロ弱やから、それくらい
の距離やね、コーちゃんが走るのって」

陸上競技を始めて、専門種目が決まった報
告をした時、マユミおばちゃんはそんなこと
を言った。スパイクの靴紐を強く結び直しな
がら、何の脈略もなく、僕はマユミおばちゃ
んの言葉を思い出したのだった。

僕の心の中にいた〈弱気の虫〉が一匹残ら
ず姿を消していた。間もなく僕は、スター
ターのピストルの音と同時に走り出し、この
トラックを二周するのだ。

僕は今夜「おばちゃん、腹一杯唐揚げ食
べさせてえー」などと、マユミおばちゃんに
遠慮なく褒美をねだって、甘えられそうな気

がした。僕のために唐揚げを揚げてくれるマ
ユミおばちゃんの写真が浮かんだ。きつとマ
ユミおばちゃんは、「自分一人で食べんと、
マッサージしてくれた里志君にも、唐揚げを
半分あげなさいよ！」と、言うに違いないだ
ろな、と、僕は思った…。



《最優秀賞》

随想部門

イルカの詩

小野 まゆみ

娘達が幼かった頃、家族そろってよく旅行に出かけた。遊園地や海水浴、スキーなど家族一緒に楽しめそうなところを探し、よく連れて行った。その娘達が小学校に上がる頃、イルカと一緒に泳げる施設が和歌山県の串本にあると聞き、そろって出かけたことがある。現地に行ってみると、だだっ広い海の真ん中に竹垣で囲っただけのような生け簀^いがあり、そこに行くのにも乗り合い船に乗らないと行けないような所だった。ゆらゆら揺れる不安定な生け簀の縁に座り、中にいる数頭の

イルカにジャンプや回転の合図を送ったり、背びれにつかまって一緒に泳いだりするというものだった。もちろん、親も同じくウェットスーツを着込み気合い十分で参加した。

ところがいざ背びれにつかまって泳ぐだんになると、イルカたちは私たちの意気込みを見透かすかのように小さな娘を背中に乗せながら、悠然^{ゆうぜん}と穏やか^{おだ}に生け簀の中を泳いだ。背びれから娘の手が離れそうになると優しくうな目をしながら、その場で少し待つような仕草までした。「なんや、たいしたことないなあ。子どもでもいいけるやん」そう言いながら、次は夫がイルカの背びれにつかまった。と、同時にイルカはものすごいスピードで水しぶきを上げながら泳ぎ始め、カーブでも速度を落とすことなく泳ぎ切った。戻ってきた夫は「もうちょっとで振り落とされそうやったで」と言いながらすっかり息が上がっていた。「今さっきと全然違う」その次に泳ぐことになっていた私はビビってしまった。しか

し、私のときは再びそれなりにゆったりとしたスピードで泳いでくれた。つまり、イルカたちは完全に私たちの年齢別・身体能力レベルを見切っていたのだった。

「イルカって、ほんとうに賢いねえ。なにも言わなくてもわかるんやねえ」というのが、娘たちの感想だった。

下の娘はこのときのことがよほど印象に残ったらしい。「大きくなったらイルカの調教師になりたい」と言い出した。小学校に入学するまで、彼女はなりたいものがその都度変わる子どもだった。保育所年少組の頃は「大きくなったら何になりたい?」と聞かれると、「合体ターボロボ」(確かに大きくなるのには違いないけど...)と元氣よく答え、年長組になると「大きくなったら男になるんだ」と、とりあえず人間になるところまでは進化していた。というわけで「イルカの調教師」と職業名が答えられるようになったときは親として喜んだものだった。が、娘はその後も

「イルカ」が「シャチ」に大型化したものの「調教師になる」夢に変わりなく、なんと大学受験を迎える時まで十五年近くにわたってずっとイルカ、シャチ大好き少女のまんま大きくなった。

結局、受験先を決めるときも親や担任の意見などスルーし、自分で海洋性大型哺乳動物の研究をしている大学の先生を探し、「その先生のいる大学以外は絶対受験しないからね」と言い切って、受験校を一本に絞りこんだ。残念ながら、推薦入試は高校二年生での体育の成績が響き受験できなかった。原因が、脳腫瘍の手術入院による欠席とはっきりしていたので、自分なりに納得し、早めに気持ちを切り替え受験計画をたてたようだった。が、結局、志望校への合格が決まったのはギリギリ三月末だった。そこから下宿を決めたり引越したりとバタバタの新生活スタートとなったが、とにかく親として一番心配だったのは健康面、特に手術後の治療のた

めの毎日の注射と薬だった。高熱が出たらどうするか、どこの病院に行くのか、下宿先で一人で倒れたら誰に連絡してもらうのか、いろいろ口うるさく言ったが「大丈夫、大丈夫」と軽く流され、熱が出ようと風邪をひこうと、骨折をしても片足で自転車をこぎながら、絶対授業を休もうとしない下宿生活を始めた。海洋学部だったので海上実習や水族館実習などもあり、八丈島沖で二百頭近いイルカの群れに出会ったりウミガメと一緒に泳いだりした話とか、スキューバダイビングで二、三十メートルまで潜ったときの透명한青い海の話とか、水族館実習ではシャチやイルカ、ラッコに餌をあげるときのかわいい仕草だとか、楽しい話をいろいろ聞かされ、上手に私の心配ははぐらかされてしまった。おかげでこちらも海洋性哺乳動物の生態についてはそれなりに詳しくはなったのだが…。

その水族館実習で、彼女は、幼い頃初めてイルカと泳いだ土地―串本に行くことになっ

た。真夏の炎天下のもと、シャチの餌を入れた三十キロのバケツを持って調理室と海との間を何往復もしなければならず、歩いていると指導員から「走れ！」と怒鳴られるんだなどと聞くと、心配で居ても立ってもおられず親ばかな私は娘の顔を見にノコノコと串本くんだりまで行くことにした。

案の定、脱水と疲労から微熱気味でおまけに脳腫瘍の手術時に筋膜をとるために傷つけた足の浮腫がひどく、ともに歩けないような状態になっていた。絶対家に連れ戻そうと「水族館にはお母さんからちゃんと話するから」「病気の影響で体調を崩したということにしとくから」といろいろ説得を試みたが「途中で止めたら大学にも迷惑かかるし。自分で決めた実習やのに、ここで帰ったら、結局、自分には何も残らへんと思うねん」と逆に説得され、あきらめた。

しかたなく娘を串本に残し、一人で帰る日のことだった。

イルカの子どもが網にひっかかった状態で死んでいるのが発見され、泊まっていた民宿の真ん前の海岸で解体されることになった。イルカや鯨は死ぬとその原因を特定するため解体は必ず行われるということだった。

その解体作業であるが、死因特定のために必ずすることがある。それは肺を真水につけ、浮くか沈むかを確認する作業である。肺が水に沈むということは肺に海水が入っている、つまり溺死である^{できし}とされ、肺が水に浮くということは肺に海水が入っていない、つまり窒息死であるということになる。もともと、鯨類は哺乳動物なので肺呼吸しており、呼吸するために必ず海面に浮上し、人間の鼻に相当する噴気孔^{ふんきこう}で呼吸する。噴気孔というのは、よく鯨が潮を吹くときに使う背中にある孔^{あな}のことである。私のような素人にとつては、溺死も窒息死も水中で死ぬのだから似たようなものなのだが、溺死というのは噴気孔を開いたまま自分では何とか生きようともが

くうち、誤って海水を吸い込んでしまうことによつて死に至る^{いた}というものであり、窒息死というのは自ら噴気孔を閉じ、呼吸することを止める^やことによつて死に至るというもので、明らかに違っている。今回のように若いイルカや鯨の場合は自ら死を選択する理由もなく、網などに引っかかつて生きたいともがくうち噴気孔を開いたまま溺死する場合が多いらしい。が、年老いたり病気になったりしたイルカや鯨は、自ら呼吸を止め噴気孔を閉じて窒息死をする場合が多く、たいていはそのまま海底に沈んでいくので人間の手で解体されることも少ないらしい。以前、娘から幾度となく聞かされたイルカや鯨の死について考えながら、ふと、大学入学した頃の頃、病氣や薬のことが心配で娘の下宿に押しかけていったときの話を思い出した。

下宿させるにあたっては親にとつても子どもにとつても初めての事だらけで、食事や掃除が心配、女の子だから不審者が心配……に

加え、毎日の注射が心配、薬が心配、倒れたら心配、もう何もかも心配だらけで機関銃のように「あれはどうしてるの」「これはどうなってるの」「こんな時はどうするの」と質問を連発した。そんな私に話してくれた言葉。それを思い出していた。

彼女からは「こんなまじめな話は一回しか言わへんから、黙って最後まで聞いてね」と何度も何度も念を押され、それからやっと話してくれた。

「あのね、お母さん。私は手術が終わって入院してる時にね、このままずっと退院できへんかったらどうしようって考えてた。せやから、その時に退院できたら絶対学校だけは休まんとこと思た。退院してからも、MRIや定期検査とかで、もし『腫瘍が再発しました。三日後に死にます』って言われたらどうしようかと思って、毎回道キドキしてる。せやからよけいに、今できることは今やっとなあかん、と思てる。もし自分が、学校と

か教室とか、その場所におれへん時に、今まで自分が知らなかったことを友達にわかるようになってたらどうしようとか、もしかして、私が経験できへんことを今頃、みんなは経験してるかもしれへんとか、いろいろ考えてしまう。そんなこと考えたら、じっと寝とかなあかん時間とか、休まなあかん時間とかがすごくもったいないねん。少しくらい熱があっても体がだるかっても……。もちろん授業とかもすごく大切やねんけど、それより友達と一緒にしゃべったり、けんかしてたりすることのほうがもっと大事やねん。

ほら、やつぱりそんな顔する。泣かれたら話されへんやん。大丈夫？ 続けるね。

それより、医者に『あと三日しか生きれません』って言われても『でも、自分はこんだけやったから満足や！』っていつでも言えるように生きたいねん。お母さんが心配する気持ちにはわかるけど、これだけはゆずられへん。私は自分が死ぬ時には、イルカみたいに自分

から噴気孔を閉じて、自分に『ようやった』って褒めてやりながら死ぬつもりやねん」

娘の話聞きながら、もう何も言う言葉がなくなっていた。幼い頃、私の後をよちよちと追いかけながら「合体ターボロボ」になると張り切っていた娘は、いつまのか私を追い越して、はるか先を歩いていた。

力強く、詩を謳いながら……。



《最優秀賞》

詩

部門

サクラのきょうだい

入江 輝佑

祖父母の庭には二本のサクラが植えてある
僕と妹と生まれた年にそれぞれ植えた樹だ
緑色の葉っぱをつけては

「僕の方が多い」

「私の方が形がいいわ」

つぼみをつければ

「僕の方が大きい」

「私の方が元気よ」

と競い合う

ウグイスが鳴き始め

一斉につぼみがほころび始めると

お弁当を作って

家族みんなで庭でお花見をする

「きれいだね」

「きれいだね」

花が開いているときは

どっちがどっちの花でも

気にならない

やがて花が散り夏が近付くと

こんどは毛虫がやってくる

「僕のところは少ないぞ」

「私の毛虫は悪さしないわ」

秋がすぎ冬がくると

枝だけになった木を見上げる

「僕の方がグリーンと伸びたな」

「私の方が枝がたくさんあって素敵だわ」

そんな会話を繰り返し

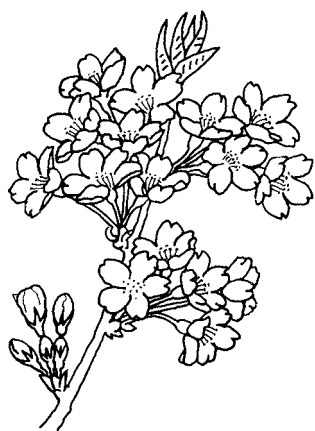
春が来るたび二本のサクラは

競いあうように大きく育ちいつのまにか

見上げるほど高く

幹もグリーンと太くなった

やわらかな春の日差しの中
僕たちはまた庭に出て
お互いに自分のサクラを自慢する
間隔をあけて植えられた二本のサクラは
お互い寄り添うように
育っているようにも見えた



《最優秀賞》

創作童話部門

お母ちゃんの力こぶ

石川 純子

「父の日なんか、いらんわ」

奈々子は、おやつメロンパンを食べながらボソリと言った。テレビを見ながら、笑っていたお母ちゃんがふりむいた。

「四年生にもなって、そんな子どもみたいなことゆうて」

「だって、父の日、父の日ってうるさいから」奈々子は、テーブルに散らばったメロンパンのクズをひとところに集めながら言った。

日曜日の昼下がり。

外は、昨日の夜からの雨が降り続いている。

父の日が近づいてくると、テレビや新聞がそろって父の日特集をする。日本には、父親のいない子がたくさんいるのになんであんな大騒ぎをするのかな。テレビの画面では、女子アナがニコニコ笑いながら「父の日にぴったりのプレゼントです」といって外国製のビールセットを紹介していた。

「じゃあ、(母の日)はどうなの?。お母さんのいない子もたくさんおるよ。そんなことをいちいち言っていたら、きりがないで」

「母の日は、ええの。うちには、お母ちゃんいるもん」

奈々子は、台所の壁にはつてあるお母ちゃんの似顔絵を見ながら言った。美人に描いたので、お母ちゃんもとても気にいっている。

「かつてなことゆうてるわ」

お母ちゃんは、プツとふきだした。

奈々子に、お父さんはいない。保育園に通っているところに、両親は離婚していた。あ

の日から、いちどもお父さんとはあつていないので、顔もほとんどおぼえていない。

奈々子が、（父の日）で頭にきているのは、お父さんへ感謝の手紙を書きましよう、という宿題がでたからだ。

「お父さんがいないのに、だれにあてて書けばええの」

「先生は、どうゆうてはるの？」

「おじいさんでもええんやて。そやけど、うちにはおじいさんもないし」

お母ちゃんは、だまつて紅茶を飲んでいる。「沙也ちゃんと、あそぶ約束してるから、行ってくる」

奈々子は、猫のポシエットを肩からさげて出かけた。四年生にしてはかなり大きい奈々子は、子ども服のいちばん大きいサイズを着ている。

五階建ての古い市営住宅は、エレベーターがない。奈々子の部屋は、五階にあるので階段をおりていくと汗ばんできた。

共同の花壇には、色とりどりの紫陽花が小雨にぬれてきらきら光っている。

奈々子は、お気に入りの水色の傘をくるくるまわしながら沙也ちゃんの家をめざした。

沙也ちゃんの家は、奈々子の家から十五分くらい歩いたところにある大きな一軒家。クリーム色の壁は、遠くからでもとても目立つ。庭には、鉄製の大きなアーチがあつてピンクのつるバラがとてもきれいに咲いていた。かつこいいお父さんと、美人のお母さん。おやつは、いつだつてお母さんの手作りだつて。いいなあ。沙也ちゃんの家族は、奈々子のあこがれだ。奈々子の、夢の中にあらわれるお父さんは、いつだつて沙也ちゃんのパパにそっくりだった。

奈々子の家は、お母ちゃんとふたりぐらしだ。コンビニと、お弁当屋さんのパートを掛け持ちしているお母ちゃんは、いつも疲れていた。食事だって、週の半分は、お母ちゃん

が買ってくる賞味期限ぎりぎりのお弁当だ。手作りのおやつなんて、食べたことがない。

沙也ちゃんちの、門柱のチャイムを押したけれど、返事がない。

「だれもいないのかな？」

奈々子は、しかたなく家に帰った。

月曜日になって、やっと雨がやんだ。

「奈々ちゃん、おはよう」

通学路で、おなじクラスのトコちゃんが声をかけてきた。

「父の日の宿題書いてきた？」

「お父さんがいないのに、書けるわけないよ」

「ほんまや。保育園に行ってる弟も、絵を描けなくてこまってる。弟は、お父さんの顔なんかおぼえてないもん。先生もむちゃいわ」

「先生は、いつもお世話になっているお父さんみたいな人でもいいゆうてはったけど」

「そんな人、うちにはおらへんなあ」

トコちゃんのお父さんは、トコちゃんの弟が生まれてすぐに、交通事故で死んでいた。弟の悠くんは、お父さんの顔をまったく知らない。

そのとき、校門から沙也ちゃんのお母さんが、走って出てきた。いつもなら、あいさつをしてくれるのに急ぎ足で、ふたりの横をとおりました。わたしたちは、顔を見合わせた。教室にはいると、沙也ちゃんはまだきいていない。

「おかしいね」

沙也ちゃんは、遅刻するような子ではなかった。授業がはじまっても、沙也ちゃんはいない。

「先生、沙也ちゃんはどうしたんですか？」

奈々子が聞いた。

「お父さんが、昨日突然たおれられたの。今日、手術だそうよ」

奈々子は、びっくりしてトコちゃんと顔を見合わせた。

家に帰ると、お母ちゃんが台所のイスでうたたねをしていた。髪に白髪がぼつぼつとまじっている。やせた背中が、息をするたびに小さく上下する。

奈々子は、お母ちゃんが四十才のときに生まれた。だから、お母ちゃんはクラスの友だちのお母さんの中ではいちばん年をとっている。参観日のときなんかには、ほかの若いお母さんたちとくらべて、年をとったお母ちゃんのことを恥ずかしいと思うことがあった。奈々子は、宿題をしながら、お母ちゃんがおきるのをまつた。宿題がだいたい終わってもお母ちゃんは目をさまさない。

そのとき、目覚まし時計が、ピロピロとなった。

「あっ！」

その音で、お母ちゃんがとびおきた。

「仕事に行かないと」

お母ちゃんは、洗面台に走っていった。

「なかなかおきひんから、心配したで」
「ごめんな。ちよつとつかれてたんや」

お母ちゃんは、お弁当屋さんのパートにいいで出かけた。きょうは、五時から十時まで勤務時間。夕食は、カレーうどん。おとといの肉じゃがの三段活用だ。一日目は肉じゃが。二日目は肉じゃがにカレールーを入れてカレーライス。三日目はカレーうどん。わたしは、カレーに水とかつおだしの素を入れて煮立たせてから、ゆでうどんをぽちゃんとした。なべから、おいしそうなにおいがしてきた。お母ちゃんのおいだ。

そのとき、心の底にいつもの不安がぞわぞわとわいてきた。

お母ちゃんの疲れた寝顔を見ていると、ときどきものすごく不安になってくる。そばにいるのがあたりまえだと思っているお母ちゃん。このまま、目をさまさなかったらどうしよう。わたしは、ひとりぼっちになる不安を、だれにも言えずにかかえていた。

きょうは、「父の日」の作文を出す日だ。

作文は、きのうの夜に書きあげた。

お母ちゃんと二人で暮らしている毎日のことを思いうかべながら、一生懸命考えて書いた。

さそいにきたトコちゃんに作文のことをきいた。

「トコちゃん、作文書けた？」

「まあな。なくなったお父ちゃんの写真を見ながらなんとかね。奈々ちゃんは？」

「うちも、なんとか」

校門まできたとき、沙也ちゃんが手をふっている。

「沙也ちゃん。お父さんの手術どうだった」

「うん。大成功だった。しばらくは、入院しなくちゃならないけど」

沙也ちゃんが、うれしそうに笑った。

しばらくして、父の日の作文がかえされた。

「やったね！」

はなまるのさんじゅうまる。奈々子は、作文をお母さんに見せた。

「どれどれ、いったいなにを書いたんや」

お母さんは、老眼鏡をかけて読みはじめた。

（わたしに、お父さんはいません。小さいときに、両親が離婚したからです。お母さんは、仕事を二つも掛け持ちして働き、わたしを育ててくれています。保育園のとき、動物園のパンダの前にいったときです。よその子がお父さんに肩ぐるまをしてもらっていました。わたしは、うらやましくてその子をじっと見ていました。そのとき、お母さんがいきなりわたしをだきあげて、肩ぐるまをしてくれました。とても高くて、パンダがよく見えました。わたしは、お父さんみたいに力持ちのお母さんが大好きです。）

「奈々子、じょうずに書けるなあ。お母ちゃん、うれしい泣けてくるわ」

「それほどでもないけど。母の日が、一年に二回あると思うことにしたんや」

お母ちゃんは、いきなり立ち上がり、ほそい右手に力こぶをつくった。

「どや。人は見かけによらんもんやで」

「わあっ！。お母ちゃん、すごいなあ」

奈々子が横に立つと、いつのまにか身長がお母ちゃんの目の高さにまでなっていた。

「奈々子、大きくなったなあ」

「うん。お母ちゃんが年とつたら、うちが背負うてパンダを見につれていったげる」

お母ちゃんが、うれしそうにうなづいた。



優秀賞

《優秀賞・一般の部》

小説部門

シーポールちゃんが喋った日

福嶋 あきら

私、いま町長室に監禁されて大人の人に囲まれていきます。人生最大のピンチ。おばあちゃん、ごめんなさい。いちばん難しい顔をしているのは、観光協会の会長さん。そして、元から怖い顔だから、どれくらい怒っているかわからないけど、漁協の組合長さん。あ、優しい顔の買受人組合の組合長の眉毛も、びくびく震えてる。この中で私にいちばん年が近いのは、実は町長さんです。去年の選挙では三十台で当選したんだと聞いてます。今は四十歳。それでも私の二十二コ年上です。と

らえどころのない笑みが、若くても政治家らしく、むしろいちばん怖いかもしれないです。こんな若い娘を、煙草の匂いが染み付いた古い応接セットに金縛りにさせて、大人たちは私をどんな酷い目にあわせてるのだろうと、思われるかもしれません。でも、私がダメなんです。私は喋ってはいけないことを喋ってしまったから。いえ、そもそも私は何があっても、この町で喋ることを許されない身だったんです。きょうの午前十時から午後三時まで。では。

はじめに口火を切ったのは、体格的にもいちばん存在感のある町長さんでした。

「臨時職員と言っても、うちの職員です。今回のことはそういう意味では私に責任もあるので、まずはお詫びします」

申し遅れましたが、私、森村アユミ十八歳は、この五月から、おばあちゃんちのある港町・月浜町で臨時職員をしています。税務課の方が育児休暇を取るので、その代役という

ことで、書類作成なんかをやっています。あ、議長だ。町議会議長まで、むずかしい顔をして町長室に入ってきました。この中ではダントツで長老、たぶん昭和一桁世代です。顔が赤らんでいて、足元がちよつとふらついています。後援会でさんざん飲まされたうえでの登場だと思われます。

「議長、お待ちしてました。いま始まったばかりですから。つまり、今回シーポールちゃんが喋ってしまったことは、偶発的な事象とはいえ、私の不徳の致すところ、監督責任があるというのはそのとおりです」

シーポールちゃんというのは、月浜町のゆるキヤラです。白いカモメの着ぐるみなんですけど、目が怖いとか、いまいち可愛くないとか言われています。毎年、九月最後の土曜日にある「月浜さんまつり」にも登場するけど、サンマ炭火焼の無料配布の煙の陰に隠れて、いまいち存在感がありません。毎年煙を体に吸収して、今やだいたい灰色のカモメになって

います。中に人は入っていないことになっていますが、中の人は、役場の職員です。というか、今年は私なのでした。

観光協会のジュンさんが次に発言するようです。ちなみに人口六千人の月浜町のうち、三千人は森村姓で、二千人は阿川姓。そのため、だいたい老若男女とも屋号か下の名前で呼び合います。係長も課長も隣の課の技術参事も森村なので、決裁文書の書類作成者欄に押す私のハンコは、区別がわかるように「アユミ」だったりします。ジュンさんは、阿川だったはず、たぶん。

「町長さん、あなたがどうこうという問題じゃなくって、これまで十年に亘^{わた}って作り上げてきたキャラクターってものがあるんですよ。それが今日、一日にして崩れたわけです。どうしてくれるんですか？ シーポールちゃんが祭りの途中で勝手に喋り始めて、あぐく海にダイビングしたんですよ。着ぐるみはいいさ。いまY水産の乾燥機の中で、もうすぐ乾

くでしょう。けど、親しみやすいキャラクターが台なしなわけですよ。町として何とかしてくれますよね」

シーボルちゃんが親しみやすいキャラクターだったとは、私も初耳です。目が怖いというネットの評判を、この大人たちは見たことがないのでしょうか。でも、今の私は反論ができる立場ではありません。いや、でも反論したい点はもっと別にあるのですけど。



今年の三月のこと。私は地元で最も難関だといわれている、国立A大学の法学部を受験して、落ちました。高校では勉強を頑張って、いつもトップレベルをキープしていた私。まさか落ちるとは思ってなかったのでショックでした。要領だけいいような子が合格していたり、模試で一回もB判定すら取ったことのない子も通ってたり。私なんかいつもA判定だったんだから。どうしようか……もう後には引けない気がして、浪人するしかないと思

いました。でも、とりあえず息抜きしないと、心も体も変になってしまいそうでした。ツイテールにしていた髪をバツサリとショートにして、赤色の縁のメガネを、これまで何となく避けてきたコンタクトに替え、月浜町にやって来ました。家のある地方中核都市・A市から月浜までは、高速バスが出ていて、だいたい2時間くらいの距離になります。

小学生のとき、漁協に勤めていた父親が上海に、保健所に勤めていた母親がマニラに転勤になりました。漁協職員も県職員も、県外への転勤というときいざい東京事務所くらいのものだから、お互いまさか、相手も海外勤務になるとは思ってもいなかったそうです。お互いが自分のやりたいこと——それぞれの分野での国際協力だそうです——を追いかけた結果なのだと言われたけど、こうなった一番の原因は、夫婦のコミュニケーション不足なのではないかと、今から振り返って思います。ふつう、そういう夢を持っているのなら、

相手に話すんじゃないかと思うんです。どっちにも日本人学校があるから、好きな方に付いて来なさいと言われたけど、私はそれを拒否し、おばあちゃんちのある月浜町に行くことを主張したそうです。私自身は、主体的に選んだ記憶はないんですが、まわりの大人たちの話を総合すると、そういうことのようにです。無意識のうちに私は、両親のコミュニケーション不足に対して抗議の意を示したのかもしれません。こうして私は、小学校一年の十月から三年の九月まで、おばあちゃんちに住んで、月浜町立第二小学校に通うことになったのでした。

その後も夏には毎年来ていた月浜町。去年の夏は受験勉強で来られなかったけど、漁港の活気から百メートルも離れると、細い坂道の入り組んだ静かな石垣の町並みと、世の中の何にも興味がなさそうな三毛猫ちゃんたちが、毎年私を優しく迎えてくれました。春に来たのは本当に久しぶり。今回も、月浜の町

並みは、太陽の熱をスレート岩の黒い石垣にいっぱい貯めこんで、私を暖かく包み込んでくれたのでした。

月浜に来て二日め。低い雲から小雨の降る日でした。小学校のときによく遊んでいた、同い年のシュウスケが訪ねて来ました。おばあちゃんが、「孫が帰ってきた」とあちこちで言いふらすものだから、私がここにいることは、もうみんな知っているのだそうです。港町の男の子は、腕っ節が強くて少し強引なくらい元気のある感じの子が多いのだけど、シュウスケは大人しくて、放課後は漁港の岸壁で釣りをしながら、本を読んでいるような子でした。私の家には、お父さんが子どものころに集めた本がたくさん残っていました。表紙が茶色くなった「こども文学全集」などを、よくシュウスケに貸してあげました。貸した本の読書感想文でシュウスケが賞を取ったときは、ちょっと悔しかったけど。シュウスケは、隣町の県立高校を卒業して、A市か

東京に出ることも考えたそうです。でもやっぱり月浜が好きだから、町役場で働くことにしたのだと言いました。べつにA市に出なくても、今はネットで何でも本は手に入るから、とも付け加えました。やっぱり本が好きなのは、いまでも変わっていないんだと、なんだか嬉しく思いました。その夜、たまたま町の広報で臨時職員の募集の記事を見つけたとき、私、ここで働こうと思いついたのは、シユウスケが訪ねて来たことと無関係ではないと思います。学費を少しでも自分で稼がないかとも思っていました。でも、そんな真つ当な理由だけじゃなくて、他のみんなは大学生だけど、私は社会人なんだっていうポジションが欲しかったのもあったり、町役場だからキツくないだろうという計算もあったり。そんな甘い考えがあったのも認めます。

しかし働き始めてみると、収税の仕事って大変なんです。広報をやっているシユウスケも大変そうだけど、臨時職員でも、ぜったい

こっちの方が大変。収税っていうのは、固定資産税とか町民税とかを払ってくれない町民さんに、なんとか税金をお納めいただくお仕事です。私は臨時職員だからサシオサエとかはできないけど、調書とか計算書とか、サシオサエ関係の書類を作ったり、分割払いをしている町民さんの家に行って集金したりしています。サシオサエなんて「マルサ」の仕事だと思ってました。役場がふつうにやってるなんて。そして十八歳のオトメがその書類を作ってるなんて。

私は、サシオサエっていうと、突然お宅におじゃまして、壺やら絵画やらに赤い札を貼り付けていくものだと思ってました。お宅に行ってサシオサエのことを搜索というそうです。なんか警察みたいです。でも町役場では搜索はあんまりやらなくて、普段は不動産とか給料とか預金とか、そういうものをサシオサエします。財産調査を手伝っているうちに、不動産の登記簿とかも読めるようになりまし

た。法学部は落ちたけど、ぜったい私のほうががんばっているし、法律も分かっているんだから。



そろそろ今日のことを話に戻しますね。私は、朝八時に役場に出勤し、でもお祭りの手伝いはボランティアということになっているので、出勤簿にはハンコを押さずに、そのまます少しだけ岸壁で会場設営を手伝ったあと、漁港のはずれにあるY水産の倉庫でシーポルちゃんに変身しました。着替えながら、きょう何かあっても勤務じゃないから労災じゃないんだよな、ボランティア保険には入っているのかなと思ったのですが、まさかその後、海に落とされて溺れそうになるとは考えもしませんでした。着ぐるみの少女を海に突き落とすというのは、どう考えても殺人未遂です。突き落としたのは観光協会のジュンさんです。死刑または無期若しくは五年以上の懲役です。裁判員裁判です。私が最も反論したい

点というのは、私が自らの意志でダイブしたのではなく、ジュンさんによってダイブさせられたということなのです。

でも、ジュンさんには、私を海に落とさなければならぬ、明確な理由がありました。犯行の動機とも言え換えられるかもしれませんが。シーポルちゃんは、何も言わずに「無邪気で可愛いかったくない笑顔」を振りまかなくてはならなかったのですが、そのシーポルちゃんが、あろうことか、すごい剣幕で喋ってしまったから。

九月末とはいえ強い日差しの中、港の岸壁を会場に開催されるサンマ祭りは、周辺の市町村や遠くは首都圏から、一万人以上の人を集めていました。半島にある月浜町につながる一本道の国道は、朝のうちから町境までつながる大渋滞となるほどでした。車で町の中心市街に入ると、目の前にれんが造りの観光施設「マリンポル月浜」が姿を現します。マリンポルには、今日のようなお祭の日になる

と、大漁旗が何十枚も揚げられ、漁港らしさが演出されます。大漁旗たちは、ホヤのように少し潮臭い香りがする海風のなかで、誇らしげに泳いでいます。湾口から吹いて来る風は、昼前から徐々に強くなってきて、でも、それはサンマ炭火焼の煙を拡散させるので、ひたすら何千匹ものサンマを焼き続ける青年団の人たちにとっては好都合でした。厚着をしている私にとっては、風が少し強くなったところで涼しさを感じることはできません。熱中症にならないように、三十分に戻、マリンスポルの裏手にある物置のなかで、休憩をさせてもらうことになっていました。私の大好きな、甘いミルクコーヒーの黄色い缶が、山のように積まれていましたが、汗をかいて塩分が不足していたので、せっかく用意してくれたのに申し訳ないなと思いつつ、麦茶とシソ巻き味噌ばかりを口に入れていました。少し長めに取らせてもらったお昼の休憩も終わり、また出番です。今は午後一時。あと

三回か四回ほど出て行つて三時になれば、今日の任務は終わりになるはずです。テンションをシーポールちゃんモードに入れ直します。

物置から岸壁に出ていこうとしたところ、岸壁の祭り会場の端っこあたりで、小学校高学年くらいの子が四人ほど、集まって何か話をしているような様子が見えました。着ぐるみに入った人はわかると思いますが、そのキャラクター特有に求められる動きがあって、シーポールちゃんの場合はカモメなので、羽根を上下にバタつかせながら、少し左右にぶれた歩みを対象に進めていくわけです。シーポールちゃんの顔は、常に少し怖い目つきのままなのですが、中の人の表情がキャラクターに現れて来るのだと、ジュンさんがしきりに言っていました。シーポールちゃんモードに戻った私は、手始めに、良い反応が得られそうな小学生を対象に選ぶことにしたので、誰にも見られない笑顔を作っても、大人たちにはスルーされてしまう可能性が大で

す。昼一番に、そんな精神的ダメージは避けたいところです。しかし、これが誤算のはじまりでした。



「アユミちゃん、アユミちゃん」

あ、私、長々と回想にふけって、みんなの話が上の空になってしまいました。町長さんが私に話しかけています。

「聞いてた？」

ごめんなさい。なんか、いろいろごめんなさい。

「議長さんがさ、どういうわけがあったか聞きたいて、そういうことなだけど」

はい、すみません、ちょうど回想の続きになります。

「シーポールちゃんの中に居た私は、小学生の男の子が、同級生たちからいじめられているのを見つけてしまって、それで我慢できなくなって、つい、声が出てしまいました」

要約すると、こういうことなのですが、こ

れでは何の説明にもなっていないって、私にもわかります。酔っていてもさすがは議長です。かよわきオトメにも、容赦なくつつこみを入れてきます。

「それじゃ何もわからないよ。何でそんなに腹に据えかねてしまったか、僕はそこを聞いてるんですよ」

でも、私は税務課の職員で、地方公務員法に加えて、地方税法第二十二条により更に厳しい守秘義務があるのです。破ったら二年以下の懲役又は百万円以下の罰金です。相手が議長だろうと総理大臣だろうと、税務上知り得たことは話してはいけません。もっとも町長は、税務も総括する町職員なので、町長だけになら話せるんですけど。

男の子のうちの一人を、私は知っていました。いじめられていた子のことです。このまえ搜索に行った、その家の子です。つまり高額に滞納されている方の息子さんということになります。そんなこと、地方税法うんぬん

を抜きにしても、人として言えないです。この方は、森村でも阿川でもない、月浜では珍しい苗字なのですが、仮にQさんということになります。町内のマリンポルの近くで水産加工の工場を経営されてます。主に町内で養殖された最上級の帆立貝を蒸して干して、高級な中華食材を作っておられます。干貝柱は、私が生まれる前の「バブル」という時代には、国内でもよく売れたそうですが、その後は、台湾や香港に輸出して、なんとか捌^{さば}いてきたそうです。そうしているうちに、今度は中国大陆の経済がめざましく発展し、干貝柱の消費も増えたため、生産が追いつかなくなってきました。地方銀行の支店長が会社を訪ねてきて、工場を増設するように勧めました。社長のQさんは銀行から億単位のお金を借りて新工場を建て、EUにも輸出できるような基準の設備を整えました。

しかし、悲劇は地球の裏側からやってきました。主にヨーロッパに冷凍や生鮮で供給さ

れていたペルー、チリ、アルゼンチンといった南米の帆立貝が、現地で干貝柱に加工され、中国に流入し始めました。同じタイミングで、月浜湾一帯に貝毒が発生し、何ヶ月も帆立貝の水揚げができない事態が重なりました。もともと価格競争力では南米産に劣る立場。みるみるうちにQさんの会社は経営に行き詰まり、やがて銀行に借金を返すことも、税金を納めることもできなくなってしまいました。

この話は全て、搜索のときにQさん本人から聞いた話です。世の中のことをまだよくわかっていない、ついこのあいだまで高校生だった私なので、聞き違いもあるかもしれません。それに、私は臨時職員ですので、搜索に加わったわけではありません。会社の前に停めた公用の軽トラックのなかで、駐車違反を取られないように待機してただけだったのですが、搜索の途中で立会いに嫌気の差したQさんが、煙草を吸いに道端に出てこれられ、

そこで都合よく話し相手として見つけた私にお話しになったのです。そのとき学校から元氣なく帰ってきたのが、きょう岸壁でいじめられていた少年だったのです。

Qさんは銀行から金を借りて工場を建てたので、その土地にも工場にも、銀行の抵当権がビタビタに付いています。サシオサエの立場からすると、先に抵当権を打たれていると銀行が優先して配当を受けるので、どう頑張ってみても、町には一円も入って来ません。そこで他の財産をサシオサエようとするわけですが、一般債権者も国税も県税も寄ってたかって回収にかかっている状況にあつては、もう財産と言えるようなものは何もなく、私たちが捜索に入つたのも、何もないことを確認しに行ったようなものでした。

月浜町の他の工場や漁師さんたちは、Qさんに同情的でした。特に南米産のサーモンに対して苦戦している養殖鮭の漁師さんには、他人事ではないという思いだったようです。

せめて、食べるものだけには困らないようにと、いつも誰かがQさんの会社に顔を出して、海産物や、内陸の親戚から届いたという米や野菜を持って来るのです。

子どもたちには、しかし、大人の事情はわかりません。大人たちがQさんのことを心配すればするほど、Qさんの息子は学校のなかで特殊な存在となり、良しにつけ悪しきにつけ異質なものは、いじめの対象になりやすくなるわけです。私が岸壁で出会った場面は、そのようなわけでQさんの息子がいじめにあつていたところなのでした。遠くからはじゃれ合っているようにも見えたのですが、実際はこづかれたり引つ張りまわされたりしていたために、もしかすると海に落ちてしまふのではないかという状況だったのです。



「あんたたち、やめなさい！」

私は、自分がシーポールちゃんであることを、一瞬、忘れていました。そして、自分の声を

聞いて、我に返りました。シーポールちゃんに
戻りました、というべきでしょうか。喋らない
はずのシーポールちゃん。座った目線をダイ
レクトに浴びた少年たちは、いじめっ子とい
じめられっ子の別け隔てなく、あっけに取ら
れているようでした。

いままえば、私はそこから全速力で逃げて、
知らぬ存ぜぬを通すべきでした。そして、子
どもたちの空耳だと言い張れば良かったので
す。

「あんたたち、やめなさいポール！」

シーポールちゃんだから、語尾にポールをつけ
ればよいのでは、というのが、一瞬のうちに
考えた、私なりの答えでした。あまりに安直
すぎたと反省しています。

「あ、シーポールが何か喋ってる」

「とにかく、仲良くしないとだめポルッ。な
んでそんなことするポルか？」

「だってこいつんち、貧乏だし、お父さん会
社つぶしちゃってよー、だっせえ」

「新しいことに挑戦して、それで失敗したこ
とが悪いこと？ ポルッ？ 商売なんだポル
から、うまくいかないこともあつて当然じゃ
ない？ つていうか、当然じゃないポル？」

その子に非があるってわけじゃない。お父
さんだって、月浜の産業のことを思つて、勇
気を持って打つて出た結果、たまたま上手く
いかなかっただけなのです。それで貧乏して
るからつて、仲間はずれにしたり、海に落と
そうとしたりするなんて、私は、相手が子ど
もであつても、絶対に、許せないという気持
ちになったのでした。

ちようどこのあたりで「勝手に喋るな」と
いう怒鳴り声とともに、シーポールちゃんの腰
あたりにジュンさんの飛び蹴りが入つて、私
は海に落ちたようです。シーポールちゃんの視
界には死角が多いので、そのときは何が起
こつたのかよく分かりませんでした。ただ、
私が仰向けに落ちていくのにワンテンポ遅れ
て、ジュンさんが岸壁の端でバランスを崩し、

やはり海に落ちていこうとしているのが見え
たような気がしました。

町長だけにはあとから話ができるとして、
さて、なんとか他の大人たちを納得させる方
法はないものでしょうか。おばあちゃんにも
悪いし、それにシュウスケにも何って言っ
たらいいか。泣いて許してもらえと思つたわ
けではありません。泣いて許してもらおうと
する女の人って、私は大嫌いなんです。でも、
情けなくて涙が出て来ました。柱時計の振り
子の音だけが、町長室に響きます。涙は音も
なく流れて、膝の上に落ちました。せめて、
泣き咽むせばないようにしようと思ひました。

次に聞こえた音は、町長室の扉をノックす
る音でした。もう今さら新たな登場人物は増
えてほしくないところです。失礼します、と
言つて入つて来たのは、今の私の泣き顔を一
番見られたくなかつた人、シュウスケでした。
「あの、遅くなりました。アイスコーヒーで
良かったでしょうか？」

空気の抜け道ができたためか、窓から涼し
い風がすーつと入ってきました。シュウスケ
は、ミルクの入ったアイスコーヒーをみんな
の前に置いていきます。全員に配り終えるま
えに議長がずつとストローを吸いました。
「甘いなあ。ふつうアイスコーヒーって、ク
リームとシロップは別に出さんかい。それに
ちよつと寒い」

「すみません、きょう余つた缶のやつなんで」
町長さんが苦笑いします。

「すみません、こんな若者ばかりで」
でも、私にとつては、いちばん安心できる
甘さ。シュウスケありがとう。

泣き顔を見られたくなかつたので、ちらつ
とだけ、シュウスケのほうを見ました。何か、
紙を一枚持つていました。

「もし、よかつたら、今日のさんま祭りの原
稿作つてみたんで、休憩がてら見てもらつて
いいですか」



「ほんと、きょうはシユウスケに助けられた、ありがとう」

私はその後、町長室から解放されました。いまはシユウスケの車の助手席。町はずれにある岬の公園の展望台に、少しサンマの煙りの匂いが残る軽自動車を停めて、冷えていない缶コーヒーを飲んでいます。もちろん、すっごく甘い、黄色い缶のやつです。

「やっぱりシユウスケ、文章上手だよね。いつのまに、写真まで入れて記事を作ったのかな。それに：シーポールちゃんが喋ったこと、逆にネタにしようっていうアイデアも」

——シーポールちゃんが祭りの最中に、いつもより元気に跳ねまわったかと思うと、突如猛然と喋り始めた。これは、いまひとつ人気の出ないシーポールちゃんに対して観光協会が考えた新機軸であり、今後は、おそらく全国初の「自分の声で何でも直言するゆるキャラ」として活動していく模様である——シユウスケの書いた記事は、そのような内容でした。

「ぜったいメチャクチャに怒られると思ったんだけど。でも僕が怒られたら、アユミの方に行く矛先が、ちよつと僕のほうに来るんじゃないかと思つて。でもビックリしたな。このデタラメな記事の内容に、ジュンさんが乗ったんだから」

町長室の応接テーブルの真ん中に置かれた、一枚の原稿。五人の大人の大人が、甘いコーヒーをストローで啜りながら、記事の内容に目を通していました。私は、泣き過ぎたせいか、コンタクトがずれてしまつて、その輪のなかに入れなかったのですが、ほどなくしてジュンさんが「いいアイデアだねえ。これでいこう」って言い出したんです。

ジュンさんも、シーポールちゃんがいまいちであることは、やっぱり認識はしていたようで、とはいえ何もアイデアもなく、ずるずるとここまで来ていたようでした。ゆるキャラが自分の意志で話すことが新機軸になる。シユウスケの記事で、そのことに気付いたよ

うです。

シーポールちゃんに関する最終的な決定権は観光協会にあるので、ジュンさんがそれで良いのであれば、漁協も買受人組合も町議会も、何もいうことはないということになりました。ただ、今の「喋らない」設定をもとに作った観光リーフレットが大量に残っており、これを使いきってから……とのことで、シーポールちゃんが本格的に話し始めるのは新年度を待つということも、なんとなくその場で決まったのです。

「昔からアユミって、正義感強いって言うか。でもそれだけが先走ってさ。あとさき考えずに、突っ走っていく感じ。髪をショートにして眼鏡もやめて、また昔っぽくなったなあと思ったら、性格もそのまんまで。でも、子どものときも、そんなアユミにだいぶ助けられてたんだよな」

あのことかな。岸壁から男の子を突き落とした話。私も実は、ジュンさんのやったこと

と似たり寄ったりで。

「釣りしながら、アユミから借りた本を読んだら、トモキとカズヒロに、その本をいきなり取られちゃって、海のなかにポーンって投げられて。どうしようと思ってたら、たまたま遠くからアユミ、見てたんだよね。すごい勢いで走ってきたかと思うと、トモキを蹴り飛ばして海に落として、海底からでも拾って来いって」

それで、みんなで先生にすごく怒られた。海に捨てられた「海底二万哩」は、戻ってこなかったけど、つぎの誕生日にシュウスケは、「地底旅行」を私にくれた。

「アユミさ、またこっちに戻って来る？」

遠くに見える漁港の夜景を眺めながら、シュウスケは言いました。船のエンジン音が、足元を港内へと移動していき、少し遅れて、重油の煙の匂いがしました。

もう、そろそろ、私の任期が切れることになっていました

「戻ってこないんだろうなあ。でも、忘れないでほしいなあ」

シフトレバーに置いたシュウスケの左手に、私の右手を重ねました。漁港の水銀灯は、また、少し潤んで見えます。

「ここまで二時間だから、また私、遊びに来るよ。でも、私やつぱりちゃんと勉強する。正しいって思ったことでも、勢いだけじゃ空回りするばかりで。今日みたいな失敗しちゃうから。ちゃんと勉強して……中身、伴わないとね。みんなの力になれるように頑張るから」

未来はどうなるか分からない。まるで海底か海底を旅行するようなものだと思います。でも、子どものころに読んだ「海底旅行」の話では、海底を探検していた教授たちがマグマの流れに乗って、地上に帰って来ました。そんなふうに、何かが将来、すごい勢いで私をここに戻してくれる。そんな気がしました。

そのときシュウスケはもうオジサンかな、お父さんかな、お爺さんになってるかな。そしたら私も、おばあさんだよね。

車は再び、町中へと戻って行きます。近づいて来る漁港の明かりは、もうさっきのように潤んではいけません。細い国道で、サンマを都会に運ぶ大きなトラックとすれ違いました。漁港の一日は、もう始まるうとしていました。

《優秀賞・学齡児童生徒の部》

小説部門

手のひら

山本 幸

私の手のひらは、そんなに大きくはない。必要なものを全てつかめるほど、大きくはない。それどころか、目の前のことから逃げ出してばかりな私の手のひらには、もう何もない。こんな私はどう生きていけば良いのか。ああ、誰か教えてはくさいませんか。

裕美は、自分という人間は何も取り柄がないと決め付けていた。何事も怖がって、何もしようとはしなかった。そんな裕美に他人は決まってこう言った。「あんた何も出来ないのね」そう言われるたびに、裕美はいつも胸

が締め付けられていた。必要のない人間だと言われているようで、たまらなく逃げ出したかった。だからいつも俯^{うつむ}いていた。耳を塞ぐようにして。

裕美の家は母子家庭だった。裕美の父は幼い頃に他界したのだ。そんな一人っ子の裕美は高校生になってから、母からも見放されるようになった。あからさまに、というわけではなかったが、徐々に裕美に対する口数が減り、遂には氣遣いさえもかけられなくなった。仕事忙しいのだ。仕方がない。と自分に言い聞かせていた裕美だったが、それでも心の何処かに寂しさを忍ばせていた。学校に行っても友達などおらず、誰にも相談することはなかった。ああ、私はどうでもいい存在なのだと、自分でさえも自身を必要とはしなかった。私には何もない。特技も趣味も、何も持っていない。頭が良いわけでもないし、運動だって出来ない。社交的な性格でもない。こんな人間は何処に行けばいいのか。

裕美はいつも世界の隅に追いやられている気分だった。

高校一年の夏、裕美は母方の祖母の家に、夏休みの数週間を使って泊まることになった。提案したのは母方の祖母の裕子だった。梅雨頃に電話で、どうせ何もすることなどない、と言った裕美に、「うちにおいで」と気さくに声をかけてくれたのだ。母の真美子も特に問題はないと承諾した。そんな母を見て、裕美はまた見放された気持ちになった。母にとつて、自分は邪魔な存在なのかもしれないと決めつけた。裕美はそんな感情を振り払うようにして、祖母の家に滞在することを決めた。特にすることもなし、あの家から私が居なくなれば、母も楽になるだろうと、そう思つてのことだった。

祖母の家は、田畑が広がる閑静な田舎にあった。当然、近所にはスーパーも何もなく、自給自足の生活だった。しかし景色だけは極上のものだった。車での移動中、裕美は窓か

ら見える風景に感動した。一面の水田や、その上に広がる青空。ゆるやかに流れる小川。全てが澄み切っていた。きつと都会では見られない光景だろう。ちらほらと見える小さな家々も、いいアクセントになっている。ここで私は数週間の間、生活を送るのか。裕美は少し気分が高揚したようだった。真美子は裕美を送ってから、少し祖母と立ち話をしたあと「いい子にしているのよ」と裕美にそれだけ言ってから、荷物を渡してすぐに帰つていった。真美子が乗った車の後ろ姿を、裕美は見えなくなるまで見つめていた。

祖母の家は趣きのある木造建築だった。裕美は新鮮な、その環境のあらゆるところを見渡した。初めて目にするものばかりだ。囲炉裏や、普段見慣れない畳やちゃぶ台。縁側からは、風情が漂う庭が見られた。裕美はそれらをじっくりと目に焼き付けておきたかったが、祖母はそんな裕美を見て穏やかに微笑んだ。

「まだ初日だよ。これからいくらでも見られる。まずはお前さんの部屋を案内するよ」

そう言った祖母に、裕美はぎこちなく会釈をして、あまり多くもない荷物の入った鞆を片手に、祖母の後を付いていった。襖をいくつも開けて、狭い木造の廊下を歩いていると、その右側に少し新しい襖が待っていた。それを祖母はゆつくりと開く。そこには新しい綺麗な畳が六畳広がり、その上に小さな洋風の机と椅子、たんすがあった。居間で見た光景とは少し違っていた。すると祖母は裕美の持っている荷物を指差した。

「裕美、荷物を整理したら居間においで。ばあちゃん、おやつを用意して待っているから」

祖母はそう言って裕美の部屋を出ていった。裕美は祖母が去ってから、畳の上にべたんと座り、数秒の間、畳をやさしくさすった。きつとおばあちゃんは、私のために新しく畳を張り替えて、家具を購入してくれたのだろ

う。ああ、何だかあたたかい。そんなことを思つて。裕美は立ち上がり荷物の整理を進めた。

裕美は少し迷いながら、居間にたどり着いた。祖母は背を向けて、縁側のそばで茶をすすっていた。

「おばあちゃん、荷物の整理終わりました」後ろから声をかけられた祖母はゆつくりと振り向いた。

「随分早かったね」

「荷物、少なかったの」

うつむき加減でそう言った裕美に

「そうかい」

と祖母はやさしい声をかけた。

「さあ、お茶にしようか。長い移動で疲れただろう」

裕美はちゃぶ台に目を向けた。ちゃぶ台の上にはトマトや瓜が並んでいた。これがおやつなのかな、と一瞬間を待った裕美だったが、祖母がきつと吟味して選んでくれたのだ

と思うと、くすぐったい気持ちになった。裕美はゆっくりと座布団の上に座った。

「いただきます」

とトマトを両手に持ってかじった。ふわりと優しい甘みが広がった。トマトってこんなに甘かったつけ。

「美味しいです。こんなに美味しいの初めて」

それを聞いて、祖母はばあつと笑顔をみせた。

「それ、ばあちゃんが育てた野菜なんだよ」

裕美はそれに驚いて、トマトと祖母の顔を交互に見つめた。

「本当に？」

そう裕美が尋ねると祖母は嬉しそうに頷いた。

「まだまだたくさん野菜を育てているんだよ。畑、見てみるかい？」

裕美は急いでトマトを頬張りながら頷いた。祖母の家の庭を降りると、大きな畑が広がっていた。裕美は思わず声を上げた。

「すごい！これ全部おばあちゃんの畑？」

「そうだよ。でも畑で採れるものは、全部村のみんなで分け合うんだよ。そうだ、裕美。ちよつと収穫してみるかい」

裕美は瞳を輝かせて頷いた。祖母は裕美に収穫の仕方を丁寧^{ていねい}に教えた。茄子やトマト、瓜にきゅうり。西瓜もあった。収穫時なものを祖母に尋ねて、裕美はひとつひとつ、傷つけないように収穫した。

時間が過ぎるのはあつという間だった。ふと空を見上げると、もう茜色^{あかね}に染まっていた。その綺麗な夕焼け空に裕美はしばらく魅入った。祖母に声をかけられるまで、ずっと夕日を眺めていた。

翌日は、一日中縁側で過ごした。のどかな空をただ見つめていた。裕美は自分に問うていたのだ。あの大きな空は、きつと何もかもを知っている。抱いている。その空の下にいるというのに、どうしてこんなにも自分はちっぽけなのか。じりじりと照りつける太陽

を一瞬目にしてから、裕美は自分の手のひらに目を落とした。そこには孤独な残像だけがあった。そんな裕美の背中を、祖母はじっと見守っていた。

「さて、じゃあ昨日裕美が収穫してくれた野菜で料理を作ろうかね」

その夜、祖母は嬉しそうな声色でたくさん
の野菜をまな板に並べた。そういえば昨日も
美味しいご飯を作ってくれたなど、裕美も自
然と目を細めて期待した。すると

「ひろちゃん」

と玄関の方から女性の声が聞こえた。

「裕美、ちょっと玄関を見てきてくれないかい。多分、さっちゃんだと思っただけだねえ」
ひろちゃんとは祖母のことなのだと言った裕美は氣
付いて、急いで玄関に向かった。

「はい」

と、玄関を開けると年配の女性二人が、大きな袋を片手に持って、立っていた。少しふく
よかな人と、青い帽子が特徴的な人だった。

二人とも目を丸くさせている。

「あれま、可愛らしいお嬢ちゃんねえ」

「もしかして、ひろちゃんの孫の裕美ちゃん
じゃねえか？」

二人は優しい笑みを裕美に向けたが、人見
知りの裕美は言葉に詰まって、ただ頷いた。
どうして私を知っているのだろう。何度も手
を握った。不安になると出てしまう裕美の癖
だ。すると、祖母がやってきて

「どうしたんだい、二人とも」

と言いながらサンダルを履いた。裕美はほっ
と胸を撫で下ろす。

「いやねえ、うちでとうもろこしが多く採れ
たから、お裾分け」
すそわ

「うちはレタスね」

「まあ、こんなにいっぱい。ありがとねえ。
少し待っていておくれ」

そう言ってサンダルを脱ぎながら、祖母は両
手に大きな袋を抱えて、台所の方に向かった。
そしてその直後に、また大きな袋を二つ抱え

て出てきた。

「これね、うちで多く採れた茄子ときゅうりね」

そう言つて二人に祖母は渡した。二人とも声を揃えて

「ありがとねえ」

と穏やかに微笑んだ。本当にみんなで野菜を分け合うのだなと、裕美は昨日の祖母の言葉に納得した。すると、二人は興味深そうに裕美をまじまじと見つめた。

「この子ひろちゃんの孫なんだって？ 可愛らしいなあ。大きくなつてえ」

「おばあちゃんちにお泊まりかい？」

裕美はまた手を握り返した。助けを求めるように、裕美は祖母をちらりと見つめた。祖母はそれを酌^くんだようにして二人に話しかけた。

「そうなんだよ。ちよつとこっちに遊びに来ていてねえ。その野菜もこの子が収穫したんだよ」

祖母がそう言つと、二人とも感嘆したように声を上げた。

「じゃあ、大切に頂くねえ。ありがとねえ、裕美ちゃん」

青い帽子のおばあちゃんが裕美に優しくそう言つた。

「はい」

と裕美は照れくさそうに言う。今度はちゃんと目を見つめて言えた。

「それじゃあ」

と言つて、二人は去つていった。裕美は何だか、少しあたたかいような気持ちになれた。

その後、裕美と祖母は夕食を食べた。献立はきゅうりのおひたしと茄子の味噌炒に、あたたかいごはんとネギとワカメの味噌汁。すべての料理が優しい味をしていて、裕美はそれをきれいにたいらげた。

「裕美、さっきはびっくりしただろう。二人ともばあちゃんの友だちでね。青い帽子の方がえみちゃん。太つちよの方がさつちゃん」

祖母は楽しげに、昔からの友人なのだとそう話した。

「ねえ、二人とも私のことを知っていたみたい。どうしてだろう」

裕美がそう尋ねると、祖母は微笑んだ。

「裕美は覚えてないんだねえ。昔、裕美が三歳くらいの時に一度ここへ来たんだよ」

祖母は裕美にそう話した。覚えてないと言った裕美に、祖母は当時のことを話してくれた。その時もこうして祖母の野菜を食べたということや、その時は母と父も隣にいたということ。裕美はとても活発な少女だったということ。たくさん話してくれた。しかし、その話を聞いて裕美は少し寂しくなった。日々人も、変化していくのだと知った。あの頃の面影はきつと、もう何処にもないのだろう。裕美はただ祖母の話を耳に、色褪せた畳を手のひらでさすった。

裕美の祖母の家での生活は、すぐに一週間を過ぎた。村に子供が少ないからか、村の

人々は裕美にいつも声をかけてくれて、裕美は祖母の友だちとも仲を深めていった。いつの間にか不器用だった裕美の敬語もなくなった。村の人も祖母も、たくさんのことを裕美に教えてくれた。自分の家では体験したことのない程に、裕美は色んな人と触れ合い、あたたかさを感じていた。確かに裕美の中で、何かが変化しているようだった。しかし、裕美は不意に自分の手のひらを見つめると、いつも思うのだ。自分には何もないと。そして時折『何も出来ないのね』という言葉が、胸に突き刺さった。しかしそれは真実であると裕美は確信していた。実際、ここに來てからも自分は何も出来てはいない。支えてもらってばかりだ。裕美は自分の虚しさに、ため息をつく夜もあった。

雨が激しく降った日の夜だった。裕美がいつものように居間を覗くと、祖母が倒れていたのだ。裕美は急いで村の人を呼びに行った。傘もささずに、がむしゃらに暗闇に包ま

れた夜道を走った。服が濡れようと、髪が濡れようと、そんなことは気にもかけなかった。道すがら、裕美はえみに会った。いつも青い帽子が特徴的な、祖母の友達だ。隣に旦那であらう、年配の男の人が立っている。

「どうしたの裕美ちゃん。すぶ濡れでねえか」

裕美はただ息を荒げて伝えた。

「おばあちゃんが、おばあちゃんが倒れたの。お願いです。おばあちゃんを助けて」

裕美の様子からことの重大さを感じ取ったえみは、旦那に

「村井さんの旦那さんと呼んどいで」

と用を言つて、裕美を傘にいれた。

「ばあちゃんも一緒に行くからな。それより早く乾かさないと、今度は裕美ちゃんが倒れちまう」

裕美は静かに頷いた。

村井さんという医師の方に見てもらったところ、祖母は過労による貧血だった。もう七

十を過ぎているにも関わらず、毎日暑い中でも畑で作業をしているのだから、そうなるのも無理はない。ただ、重い病気じゃないことを知って裕美は安堵した。

「良かったねえ、裕美ちゃん。ばあちゃん、たいしたことないってよ」

えみとその旦那が優しい笑みを向けてくれた。裕美は、

「はい」

とため息を吐いた。安心によるものだった。

「多分、大事には至らないだろう。ただししばらくは畑に出ない方がいい。あと鉄分をたっぷりとれば大丈夫」

村井はそう祖母に伝えた。祖母は布団から体をゆつくり起こした。

「ちよつと、ひろちゃん。寝てなさいよ」

えみが祖母に駆け寄る。祖母はえみの肩に手を置いた。

「みんな悪いねえ。私のために集まってくれて。お騒がせしたね」

祖母は申し訳なさそうに頭を下げる。その場にいた人たちは

「どうってことないよ」

と首を横に振った。そしてえみは、しばらくは見舞いに来るということと、畑の面倒も心配ないということを話した。祖母はただ

「ありがとねえ」

と頭が上がらない様子だった。

翌朝、裕美は祖母のもとに朝食を届けた。きゅうりのおひたしと卵焼き。ごはんと味噌汁。鉄分のためひじきも加えた。祖母は驚いたように裕美を見た。

「これ裕美が作ったのかい」

「うん。だっておばあちゃんが作っているの、いつも見ていたから」

祖母は有り難^{ありがた}そうに、布団から体を起こして味噌汁をすすった。ふうつと安堵のようなため息をつきながら、食べ進めた。そんな祖母を裕美はじっと見ていた。おばあちゃんの手。しわだらけの手。顔もしわくちや。きつ

と気苦労が多いせいだ。裕美は目頭が熱くなった。何も分らない頬に、涙がゆつくりと伝った。

「おばあちゃんごめんね。何も出来なくて」正座をした膝の上で手のひらを握る。そこに涙の雫がひとつ、またひとつと落ちていく。体の震えが止まらない。やはり、私は何も出来はしないのだ。すると、固く握り締めた裕美の手のひらに、しわくちやの手が優しくおかれた。祖母の手だ。

「何も出来ないなんて、そんな事あるもんか。裕美は野菜の収穫を手伝ってくれただろう。こうしてばあちゃんに、ごはんを作ってくれただろう」

裕美は顔を上げることが出来なかった。祖母の優しさは、裕美を虚しくさせるだけだった。

「私には、何もないの」

裕美は震えた声でそう言った。情けない自分が悔しくてたまらなかった。ただ、大粒の涙

を祖母のしわくちやの手に落とした。おばあちゃんの手のひらには、きつといろんなものがある。私の知らないいろんなものが。私のような何もない人間とは違うのだ。すると、祖母の手は、ゆつくりと裕美の頬に当てられた。

「裕美、お前は今、何を感じている？」

裕美はゆつくりと顔を上げて、祖母の目を見つめた。ああ、私が今感じているのは、優しいあたたかさだ。おばあちゃんの手から伝わるこの優しいぬくもりは、この数日の間、触れ合ってきたおばあちゃんや、いろんな人たちのあたたかさだ。

「裕美、お前は自分には何もないと言ったね。けれどそれは違うよ。お前にはかけがえのないものがある。それは優しさだ」

裕美ははっと胸を突かれた。

「得意なことや、誇れるもの、優れているものを持った人たちがこの世界にはたくさんいる。それはとても立派なことで、誰かの励み

になっていることなのかもしれない。けれど、おばあちゃんは思うんだよ。人はそれだけじゃないんだって。優しさや、あたたかさ、誰かを思いやる心。それも立派な自分の一部なんだ。誇れるものなんだ。それも誰かの励みになることなんだってね」

祖母は裕美の固く握った手のひらを優しく解いた。そしてその手を両手で包んだ。

「裕美、お前の手のひらには優しさがある。何にも代え難いお前だけのものなんだ。だから何もないなんてことはないんだよ。それに、お前にはまだまだ可能性がある。お前の知らないことが世界には溢れているんだよ。それを、この手で確かめておいで」

裕美は祖母の手を優しく握り返した。

「私も、おばあちゃんみたいに立派になれるかな」

裕美がそう言うと、祖母は首を横に振った。「私だって立派なんかじゃないよ。おばあちゃんの手のひらにだって、たいしたものはない

んだ」

祖母は裕美に、誰にも話したことの無い話を打ち明けた。

「うちのお父さんがね。つまりは裕美のじいちゃんが、裕美が生まれる前に他界したんだ。じいちゃんが亡くなる前、ばあちゃんは何も出来なくてね。ずっと悔しくて、立ち直れなかったんだ。でも裕美が生まれて、ばあちゃんはずいぶん幸せじゃなかったくらい嬉しくてね。裕美から勇気をもらったんだよ。だけど、今度はばあちゃんが、裕美に少しでも勇気を与えられているなら、ばあちゃんの手ひらもたいしたものかもしれないね」

そう言って祖母は笑った。裕美も上がる頬とともに優しく目を細めて、涙で濡れた頬を手のひらで拭^{ぬぐ}った。何もないと思っていたけれど、私には優しさがあるんだね。今まで裕美を押さえつけていた何かが解けたようだった。

そして、縁側から差し込むあたたかな日差

しは、すべてを悟ったかのように、それはそれは、眩^{まぶ}しいものだった。

その後、裕美は祖父にお線香をあげた。写真に映る祖父は、母に少し似ていた。数日経って、裕美は帰省することになった。村のみんなは寂しがっていたけれど、裕美は

「また来ます」

と明るい笑顔を向けた。祖母は裕美に手いっぱい、美味しい野菜が詰まった袋を渡した。あまり重くなかった荷物が一段と重くなったけれど、何だか優しい気持ちで、いっぱい詰まっているような気分になった。そして母の真美子が迎えに来て、裕美は車に乗った。車の窓から裕美は一生懸命に手を振った。

「またね」

と。それに応えるように、祖母も大きく手を振った。おばあちゃん、ありがとう。心の中でそう言った。

帰る途中のことだった。車の中で、真美子が裕美に話しかけた。

「楽しかったの？ 何かあった？」

「うん、楽しかったけど。どうして？」

「そう。何だか前よりも顔色が晴れているみたいだから」

それからまた、しばらくの沈黙があった。裕美は、母が戻ってくることを望んでいないのだろうか、またそんなことを考えてしまう。すると、真美子が言葉を発した。

「ごめんね」

「えっ？」

裕美は耳を疑った。母が私に謝るなんて。

「お母さん、ちゃんと裕美と向き合えてなかった。お父さんが亡くなってからずっと、自分のことではいっぱいだった。何より大切なものを守れてなかったなんて、ダメな母親だけど、お母さんは裕美が大好きだから」

真美子は途中から涙声で、裕美はあまり上手く聞き取れなかったけれど『大好きだから』という言葉が胸に響いた。うん、知っていたよ。お母さん。いつも私のために頑張ってく

れていたこと。気付けなくてごめんね。裕美は心の中でそう静かに呟いた。

「次の休み、お墓参りに行こうよ。お父さんに伝えたいことたくさんあるの」

「そうね。そう言えば、裕美は知っているかしら。自分の名前の由来」

「由来？」

裕美は不思議そうに尋ねた。自分の名前の由来なんて聞いたこともなかったし、何よりどうしてそんな話題が母の口から今出たのだろう。真美子はこう続けた。

「裕美の名前ね、おばあちゃんが付けたのよ。裕美の『裕』って字、おばあちゃんの裕子の『裕』と同じでしょう。『美』はお母さんの字からとったんだけどね」

全く気にはかけていなかった裕美だったが、そう言われてはっと気付いた。そうか。私は生まれた時から、ずっと優しさで包まれていたのだ。きっと、大切なことというのは感覚的なものなのだ。難しいことなんかじゃな

い。裕美はあたたかい感情で、頬をくすぐった。車のミラーにはふたりの笑顔が映っていた。私はもう、何事からも逃げ出さない。裕美はそう決意して、手のひらを優しく握り締めた。

私の手のひらは、そんなに大きくはない。必要なものをすべてつかめる程、大きくはない。けれど私の手のひらには優しさがある。私はそれをいつまでも大事に握りしめている。

あなたの手のひらには、何がありますか。

《優秀賞・一般の部》

随想部門

そんなん分かるやん

大橋 克子

息子が小学生の頃に入っていた少年野球のチームでは、一カ月に一回、母親の当番が回ってきた。当番といっても地域の子供達が集まっている小さなチームである。大半はベンチに座って子供達の練習を見ているだけで、たまにケガした子の手当てをしたりしていた。

私自身、運動は苦手だが野球を見るのは好きだから、当番は苦にならなかった。それに、当時は低学年で、まだまだ小さい子達がルールも曖昧で、ミスしてもその可愛らしさに思

わず笑ってしまふようなことばかり。今、思い返すと、子供を持つてこそ経験できる素敵な思い出の一つだ。

その思い出の中で、忘れられない光景がある。まだ、チームに入って日が浅い頃だが、チームメイトの中に女の子が一人いるのに気づいた。他の当番の方に聞くと、最近では女の子も珍しくないということだった。今は、その子一人だけけど、少し前まで他にもいたし、よそのチームにも女の子を見かけることはあると教えてくれた。確かにその後、大会などで女の子はよく見かけた。男の子に混じって一生懸命にやっている姿は頼もしい。敵チームでも応援したくなる。

紅一点のその子に、つい目が行ってしまふ。男の子に、というより他の子に負けじと活発に動き回るその姿をしばらく見ていた。練習場のフェンスを越えてしまったボールでも積極的に取りに行こうとしている。

でも、少し経ってから、私はハッとした。

「もしかして、あの子、耳が聞こえないの？」
それはすぐ確信に変わった。

コーチが「ピーッ」と笛を吹いた。みんな一斉にホームベースのところに集まらなくてはいいけない。女の子の周りにいた子達が、指をホームベースの方に向けた。女の子はうなずき、みんなと一緒に走り出した。次に、ホームベースのところからライン上に整列すると、コーチから「番号」の声がかかる。先頭の子が「一！」と叫ぶ。隣の子がすかさず「二！」。あの子はどうするんだろうと思っていたら、女の子の直前の子が「八！」と叫びながら、下ろしていた右手の甲で女の子の足を軽く叩いた。

「九！」

絶妙のタイミングで女の子の声が響いた。

その瞬間の感動は、映画を一本観たぐらいのものがあつた。私は涙が出そうになった。

その後も、子供達には驚かされることばかり。子供達は自分達の中だけで通じる手話を

持っていた。たぶん正式の手話ではないと思うが、きちんとコミュニケーションが取れている。子供達は女の子に伝える術を持っていた、コーチの指示も通訳していた。

休憩に入ると、子供達はベンチに集まって水分を取る。水筒を忘れてきた子がいないか、当番は子供達を見渡す。すると、その女の子が私の目の前に来た。水筒がないのかなと思って、私は「お茶、飲む？」と紙コップを差し出した。でも、違った。女の子は私に何かを伝えようとしている。それは分かるのだが、悲しいかな、私には何を彼女が訴えているのか分からない。どうしよう。焦る。

その時、近くにいた子が教えてくれた。

「今日、弁当持ってきてないんやって」

「え？ そうなの？」

「だから、お昼に何か買いに行くって」

「本当に？」とまだ分かっていない私に、女の子はポケットから五百円玉を出して見せた。

私はあわてて「オッケー」の指の形を作った。彼女はやっと笑ってくれた。

「なんで、みんなはAさんの言いたいことが分かったん？」

私は子供達に聞いてみた。

「そんなに分かるやん」

完全に見下された。子供ってすごい。大人が敵^{かな}わないことがあるのだ。

女の子は普段は聴覚障害の子供達が学ぶ特別支援学校に通っているとのことだった。幼い頃からの訓練で、唇の動きで相手は何を言おうとしているのが分かるらしい。それから、これは性格だと思うが、決して彼女は物怖じしない。チームメイトの中には「女の子だから」と少し気を遣おうする様子が見られたりするが、彼女にはそういう遠慮はいらないと思うぐらいだった。

子供達の様子を見ていて思ったことがある。「障害」って何なんだろう。あの女の子には「聞こえない」というハンディが確かに

ある。でも、その「聞こえないこと」は子供達の間では大きな問題ではなさそうだ。もはや「障害」ではなくなっている。子供達なり
の知恵と工夫で乗り越えている。でも、私は彼女との意志の疎通ができなくて、それは、彼女には「聞こえない」という「障害」があるのだから仕方ないと思っていけないか。

活発にグラウンドを走り回る彼女を目で追いながら思った。この私の考えこそが「障害」なのではないだろうか。

後日、障害児を普通学級に受け入れることで、子供達に思いやりの心を育てる教育が出来るという持論を話す人をテレビで見た。教育？ 私は思った。障害児を普通学級に受け入れるという、その点においては賛成できるが、「教育」なんていうのは大人の思い上がりだ。子供達には自分達で考えて、自分達で解決していける力があるのに。それは「思いやり」というものとも少し違う気がする。実際、当時のチーム内で、監督やコーチが「Aさん

に親切にしよう」なんて言ったことは一度もなかったと思う。でも、あの子供達のチームの中にはあたたかい空気がいつもあった。

私は、あの時の監督、コーチが彼女をチームに受け入れたことを感謝したい。だって、我が息子にかけがえのない体験をさせて下さった。息子はおそらく、今後の人生の中でろうあ聾啞の方に出会っても戸惑うことはないと思う。偏見を持つこともない。心が真っ白な小さな子供の時に経験できたからこそである。

だが、大人になってからでも遅くはない。私がそうだったように、子供達の姿から気づかされ、学べるチャンスはいくらでもある。障害のある子もない子も一緒に成長していける場を作ってやるのは大人の役目だ。「教育」なんていう大げさなことでなくても、地域の中の小さなコミュニティーで十分出来ることである。人と人が出会って、お互いのことを知って、共に生きていこうと思えば、多少の障害は解決できるようになっている気がする。

る。あの野球チームの子供達が自分達だけの手話を持っていたように、ちよつと考えたら「そんなん分かるやん」ということになるかもしれない。



《優秀賞・学齡児童生徒の部》

随想部門

自分らしくいること

永井 魁

「そんな変なしゃべり方すんなや」

ぼくが今まで、友だちから何度か言われてきた言葉です。ぼくだって、わざとそんな変なしゃべり方をしているわけではありません。一生懸命しゃべろうとすると、言葉が詰まったり、なかなか言葉が出てこなくて、引き伸ばしたりしてしまうのです。

お母さんの話だと、ぼくは生まれてから言葉を発するようになるのがすごくおそくて、なかなか言葉が出ない子どもだったらしく、とても心配したそうです。そして、ぼくの兄

も、同じような吃音きつおんがありました。ぼくたちの吃音が生まれつきだとわかっていても、兄弟が同じ吃音だったことで、お母さんは悩んだそうで、ぼくたちをリハビリに通わせたりして、訓練をさせたりしていたこともありました。でも、お母さんもお父さんも、ぼくたちの言葉が詰まっても、それを叱ったり責めたりせず、いつも最後まで急がず、ぼくたちの話をきちんと聞いてくれました。だから、兄もぼくも、自分ではそれほど気にせずに普段からしゃべることができたのだと思います。

普段は、気にしないでしゃべっていても、「そんな変なしゃべり方すんなや」と言われたときは、やっぱり気になります。

「なんでそんなしゃべり方なんや?」

と聞かれたりすると、答えようがなくて困ってしまうし、ときには、友だちがぼくのしゃべり方をまねたりします。そんな時は、本当にいやな気分になってしまいます。「どうし

てほくだけそんなことを言われるんだろう」と悔しくて「やっぱりぼくは変なのかな」と悲しい気持ちになります。

小学校のとき、ぼくは一度、担任の先生にそのことを話したことがありました。担任の先生は、

「別に魁くんが特別なわけじゃないんやで」と言われました。ぼくは、自分が変なのかなと思っていたので、「特別じゃない」と言われたことで、すごくほっとしたし、「気にしなくてもいいんや」と安心しました。それに、ぼくのまねしたりする友だちもいたけど、「そんなん言うなや。生まれつきやねんからじゃないやろ」と、ぼくの代わりに言い返してくれる友だちもありました。

人には、だれでも欠点や不得意なことが必ずあるはずです。でもそれは、決して「変なこと」じゃなくて「特別なこと」でもないだろうと思います。足の速い子もいるし、計算の得意な子もいるように、運動の苦手な子も

いるし、ぼくみたいに言葉の出にくい子もいるだろうと思います。

お母さんは、「魁は魁らしくて、いいんちゃう？」

と言います。ぼくがぼくらしく…それはほくだけが「特別」なことではないと思います。みんなの中で、ぼくがぼくらしくいられることは、みんながぼくのことをわかってくれることだと思います。みんながそれぞれお互いのことをわかりあっていれば、みんなそれぞれ自分らしくいられるはずです。

「特別」な人なんてだれもないし、みんなが自分らしくいられたらいいと思います。



《優秀賞・一般の部》

詩部門

風になる

中下
重美

みえないあの子は

全走力で 風になる

伴奏者の目を

自分の目にして

信じるところが

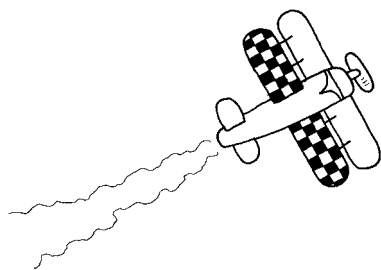
力強く 大地を蹴る

風になる

風になる

この胸のたかなりは

なんだろう
私のころも
いっしょに
走っているのだ



《優秀賞・学齡児童生徒の部》

詩

部門

サギの親子

内藤 廉哉

友達とザリガニをつかまえにいった
家の前の田んぼの用水路だ

なかなか見つからなかった
どんどん進む

バサバサバサッ

突然田んぼの中から白いサギが二羽飛びだして
きた

二羽はぼくたちめがけて飛んでくる
すごいスピードだ

ぼくたちは必死で走った

サギはぼくたちの頭上すれすれを飛んでくる
なんとか逃げた

ぼくはふと気がついた

サギの巣に近よりすぎていたのだ

巣の中には卵かヒナがいたのだろう

サギは卵やヒナを守るのに必死だったのだ

自分よりも大きい人間に向かうのはこわかつ
ただろう

きつと親はみんな子どもを守るのに必死なの
だ

必死になって子育てをしてくれているのだ

こわくてどきどきしていたぼくの心の中がほ
わっとあたたかくなった

《優秀賞・一般の部》

創作童話部門

心の色

藤本 忍

「行ってきました。」

小学校五年生の私は、二年生の弟の亮を連れて、朝いつものように家を出た。

「カタッ。カタッ」

「お姉ちゃん、待ってよ」

弟の亮が言う。亮は、松葉杖をついている。

一年半前、亮は交通事故で、右足の膝から下を失っていた。一年間の入院とリハビリでやっと退院し、義足をつけて家に帰ってきた。足を失う前は、人一倍元気で、一輪車やスケートボードをスイスイと乗りこなす程、運動神

経が抜群の弟だったのだ。でも、今は違う。重いランドセルは私が持ち、亮はまだ慣れない松葉杖を使って歩いている。

小学校までは、歩いても10分もかからない距離なのに、亮と一緒にだと20分以上もかかってしまう。亮が登校できると知った時、

「私が、亮の送り迎えをする」

と言っていたのに、今は少し疲れてきていた。

煩わしくさえ、思うようになっていた。

その時、後ろから誰かが私の頭をポンと叩き「おーい！ 早く行かねーと遅刻するぜ！」と言った。振り返ると、同じクラスの功太だ。

「分かっているわよ！」

と言いつ返したが、亮と一緒にだと、いつも遅くなってしまふ。学校に着けば、亮の2階の教室まで送り、それから3階の自分の教室まで走った。教室に入ると、すぐにチャイムが鳴る。ギリギリセーフの毎日だ。私は、友達に「おはよう」という間もなく席に着いた。

こんな生活が、もう半年も続いていた。

仲のいい舞ちゃんや美紀ちゃんも、最初は

「大丈夫?」「私も手伝うからね」

って声を掛けてくれてたけど……。今は、テレビやゲームの話ばかりで、何だか私だけがクラスで取り残されている感じがして寂しかった。

休憩時間になって、舞ちゃんが

「真子ちゃん、今日の放課後に、縄とびの練習する?」

と声を掛けてきた。

もうすぐ、学校で縄とび大会があるんだ。でも、その次の瞬間、弟の亮の顔が浮かんだ。

「ごめん、亮を連れて帰るから……無理やわ」

「そっかあ。真子ちゃんには、亮君がいたんやね。」

「ごめんね……」

「ううん、いいよ。じゃあ、またこんどね」

「うん……」

『またこんど』っていつだろう? :

私は、急に悲しくなった。

放課後、亮の教室に行くと、亮は絵を描いていた。そっと覗くと、色鉛筆で家族みんなの顔を描いていた。その中でも、私を描いた絵は、とても丁寧に上手に描いていた。私に気がつく、亮はびっくりして

「お姉ちゃん!」

と言って笑顔で私にとびついてきた。

私の可愛い弟の亮。事故で「足を切断する」と聞いた時、亮より私の方が大声で泣いていた。そして

「私の足を亮にあげる!」

と言って、両親を困らせた。亮の笑顔を見ると、つまらない事を考えていた自分が情けなくなった。

ある日、家のポストに子供会のハイキングのお知らせの手紙が入っていた。

「なかよしハイキング?」

「そう、子供会で行くみたいね。真子行く?」

「うん！行く！行く！」

すると、側で話を聞いていた亮が

「僕も行きたいな……」

「ダメ！亮にハイキングなんて無理！無理！！」

つい強い口調で言ってしまった。亮の目からたちまち涙がこぼれ落ちた。

「ごめん、ごめん……」私は亮に謝った。

「亮は、お母さんと映画を観に行こうか？」

お母さんが、亮に言った。でも亮は

「僕も、お姉ちゃんと一緒にハイキングに行きたい……」

そう言って、再び泣いた。

お母さんと私は、顔を見合わせて、ため息をついた。

「じゃあ、子供会の役員さんに聞いてみるね」

お母さんがそう言うと、亮はやっと泣きやんだ。お母さんは、早速役員さんに電話をした。すると

「有難うございます。お世話になります、

よろしくお願いします」

と言っている。お母さんは、受話器を置くと

「役員さんが『亮君もどうぞ』だって」

「えっ？ 本当？ やったあゝ」

亮は、大喜びしている。でも、私は素直に喜べなかった。

『また、私がめんどろをみるの？』

という気持ちだが、心の中で渦巻いて、急に心が重くなった。そして

「自分でリュックを持たへんと、一緒に行かへんから！」

と言って部屋を出た。私の心は、ずっしりと

重いままだ。自分の部屋に入ると

『なんで、いつもあんな言い方しか、できへんのやろう……』

という後悔で自分が嫌になった。

ハイキングの日は、眩まぶしいくらいの晴天になった。お母さんは、いつもより張り切って私達にお弁当を作り、デザートには大好物の梨とぶどうを入れてくれた。亮は、昨夜から

何度もリュックの中を見ては嬉しそうだった。

集合は、近くの公園だ。亮と一緒にいくと舞ちゃんや美紀ちゃんも参加していた。

「おはよう、亮君も一緒なん？」

「うん……」

「じゃあ、真子ちゃんは、亮君と一緒に座るんやね？」

「えっ？」

ハイキングのスタートの場所までは、バスで行くことになっていた。私は『また亮と一緒にか……』と心の中でつぶやいた。バスの中では

「お姉ちゃん、見て!! でっかい鳥が飛んでる!」

と亮は、はしゃいでいる。私は、ぼんやりと窓の外を眺めていたが、心の中は穏やかではなかった。なぜなら、後ろの席から、舞ちゃんや美紀ちゃん達の、にぎやかな声や笑い声が聞こえてきたからだ。

『私も、皆と一緒に座りたかったな……』

そんな気持ちで一杯だった。

暫くすると、ハイキングスタートの場所に着いた。そこで、参加者の班分けがされた。

「私と亮は……一班か……」

同じ班には、舞ちゃんや美紀ちゃんはいなかった。

「えっ……?」

クラスで乱暴者の功太がいた。

「わあっ……最悪……」 すると

「オッ! よろしくな!!」

私の背中を、ドンと叩いた。

「はあ……」

私は、ため息をついた。

「では、皆さん出発します。皆とはぐれないように、班で歩いてください」

役員さんが、そう言って歩き出した。

私達の一班から歩き出したのに、案の定、亮のペースが遅いので、同じ班の人や、二班、三班の人達が

「がんばってね」や「ゆっくりでいいよ」

なんて言いながら、私達を抜かしていった。

私は、ついイライラして亮に

「もつと速く歩いてよ！」と声を荒げた。

「でも……でこぼこ道やから……そんなに速く歩かれへんよ……」

「だから、亮には無理って言ったやん！」

あっ!! 遂に言ってしまった。亮は、汗びっしょりになりながら、歯をくいしばって歩いている。私は、お姉ちゃんなのに、言っているじゃないことを、また言ってしまった。

私の心は、ずっしりと重く、まっ黒だ……。

私達の後ろには、もう誰もいない。『こんな事なら、来なければよかった……』そう思うと、悲しくて、涙がポロポロとこぼれた。私と亮はお互い黙ったまま下を向いて歩いた。その時

「タッ。タッ。タッ」

ふと前を見ると、誰かが私達の方に向かって走ってきた。

「功太！」

「遅いから、迎えにきたで」

そう言っただけの前に来ると、くるっと背中を向けてしゃがんだ。

「何？」

「いいから、オレに任せろ。真子は、松葉杖を持ってやれ」

「えっ? おんぶ……?」

功太は、何も言わずしゃがんでいる。

亮は、私に松葉杖を渡し、恐る恐る功太の背中に体を乗せた。

「ほな、行くで。しっかり持つとけよ」

功太が、立ち上がった。

「お前、軽いなあ。ちゃんとメシ食ってんのか？」

「う……ん」

「真子に、おかずを全部、食べられてんのとちがうか？」と言っただけで笑った。

「そんなこと、せーへんわ!」

と、私がムキになって言い返すと、功太の背

中の上にいる亮が

「わあははは……」と大声で笑った。

亮と功太の笑い声を聞いていると、また涙が出た。でも、今度は、さつきと違う涙だ。

いつも乱暴者だと思っていた功太の優しさに私の重くて黒い気持ちさが、すーっと消えていくのが分かった。

「歌でも、うたうか？ 元気がでるで」

「うん!!」

それから私達3人は、大きな声で歌をうたいながら歩いた。こんなに楽しいハイキングは初めてだった。そして、功太が私に

「あんなく真子、一人で頑張らんでもええねんで。オレの力を使わな、もったいないで」

と言った。私は嬉しくて

「うん……。ありがとう……」

そう言うのと、また涙が溢れた。

両手で涙をぬぐいながら、ふと空を見上げると、澄みきった青い空が広がっている。

まるで、私の心のようにだった。



平成26年度 人権問題文芸作品

『のじぎく文芸賞』

発行 平成26年12月
編集 公益財団法人兵庫県人権啓発協会

〒650-0003

神戸市中央区山本通4丁目22番15号
兵庫県立のじぎく会館内

TEL 078 (242) 5355
FAX 078 (242) 5360
兵 庫 県

発行所 公益財団法人兵庫県人権啓発協会
印刷 (株)岸本印刷所



再生紙を使用しています